



Università  
Ca' Foscari  
Venezia

Corso di Laurea magistrale  
in Lingue e Civiltà dell'Asia  
e dell'Africa Mediterranea

Tesi di Laurea

# 方言新時代

## — 「ヴァーチャル方言」とその応用

**Supervisor**

Ch. Prof. Patrick Heinrich

**Correlatore**

Ch. Prof. Giovanni Bulian

**Laureando**

Sun Feilin

Matricola 887824

**Academic Year**

2021 / 2022

# 要旨

本論文は、現在日本社会における方言の活躍、いわゆる「方言ブーム」という現象について様々な意見や研究を論じる。また、具体的な例を通し、「方言コスプレ」「方言萌え」などの話題を分析し、方言の価値を再討論していきたい。

まず第一章では「方言」そのものが何であるかという問題を探求した。方言の定義、方言の存在する理由、そして、方言の分類について論じる。また、明治維新以前から今まで、日本語社会における方言の歴史を探求した。

第二章では具体的に日本言語社会における言語イデオロギーの変化について論じている。まず、戦前の「一つの言語の単位であってその中では通じなければならない」から現代の「言語を遊ぶ」までの言語に対する意識の流れをのべる。そして、近代化意識を抜き出し、標準語化の完全実現した日本言語社会にあらわれた「新方言」「ネオ方言」の概念を解釈し、具体的な例として沖縄、関西の新方言の例を出した。

第三章では 21 世紀の方言の新しい階段である「方言おもちゃ化」についてまず論じる。そして、「方言おもちゃ化」のあらわれである「方言コスプレ」という現象を中心として分析を行う。「方言コスプレ」「ヴァーチャル方言」などの用語を解釈し、極めて重要な役割を果たしている「方言ステレオタイプ」の概念を引き出した。また、「方言ステレオタイプ」が定着した理由・具体的にどこの地域がどんな方言イメージを持っている・「方言ステレオタイプ」強い方言の特徴といった角度から細かく分析した。最後に、「方言コスプレ」が活躍している重要な原因の一つ「打ちことば」について論じた。

第四章では地域・世代・ジェンダーを超え、日本語社会において広く共有された「方言萌え」というものについて研究を行う。「方言萌え」という感覚の醸成・拡散の背景、ま

た、「方言萌えマンガ」といった具体的な作品やその中の「方言キャラ」から分析し始め、主人公の「萌え属性」の「秘密」を探求し、「方言萌えキャラ」の新しい流れを討論する。最後に、「方言萌え」コンテンツに内包された問題について意見をのべる。

# 目次

要旨.....	1
目次.....	3
<b>第一章 方言概説と方言価値の変化</b> .....	<b>5</b>
「方言」とは何か.....	5
方言の「前世」と「今生」.....	8
明治維新以前.....	8
明治時代から.....	10
戦後の高度経済成長期.....	11
八十年代以後.....	12
<b>第二章 日本社会における言語イデオロギーの変化</b> .....	<b>18</b>
標準化の流れ.....	20
脱標準化の開始.....	24
沖縄の例.....	27
関西の例.....	30
<b>第三章 「方言おもちゃ化」、「方言コスプレ」と「方言ステレオタイプ」</b> .....	<b>34</b>
方言おもちゃ化.....	34
方言コスプレ.....	39
方言イメージ調査から見る結果.....	42
「打ちことば」としての「方言スタンプ」.....	49

<b>第四章 方言萌えー方言とポップカルチャー</b> .....	53
「方言萌えコンテンツ」とは.....	53
三次元から二次元へ.....	57
方言萌えマンガのあり方と対照分析.....	60
「方言萌え」コンテンツに内包する問題.....	67
おわりに.....	69
参考文献.....	71
参考サイト.....	75

# 第一章 方言概説と方言価値の変化

何時の間にか「方言」の絡む話題が多くなる。地域振興策の一貫として方言を用いた動画が話題になったり、ご当地の方言キャラが登場するコンテンツ類も続々と登場したりしている。「憧れる方言」、「かわいい方言ランキング」などの調査はメディアで報道が絶えず、「方言アイドル」だけでなく、「方言甲子園」など様々なイベントは開催されている。「方言ドラマ」はもちろん、「方言マンガ」、「方言小説」、「方言アニメ」や「方言ゲーム」、さらにCMにも方言を使われるキャラクターが多く登場し続ける。また、「方言アプリ」やLINEの「方言スタンプ」は特に若者に流行し、SNSで方言を使う発言も注目されている。旅行の時、空港や駅から商品街のお土産まで「方言の姿」があちこちにあふれる。

このように「方言」は「人気者」として各様の場合で使われ、人々の生活に溶け込んでいく。しかし、今のような光景は昔想像できなかったことである。「価値がある」と認められた今日まで、「方言」は長く「恥ずかしい」、「除きたい」ものであった。このような「方言」に対する否定的な態度のことを言語学者の柴田武は「方言コンプレックス」と呼んだ<sup>1</sup>。

## 「方言」とは何か

そもそも、「方言」とは一体何だろうか。まず、「なまり」と言われるものがある。「あの人の話し方には関西のなまりがある」といった会話が日常でもよく聞いた。つまり、「方言」といえば、「地域のことば」を思い出す人が多いと思う。言語学で「方言」というときには、話し手がどのような属性をもつ人であるのかに基づく言語変種であるために、本

---

<sup>1</sup> 柴田武、『日本の方言』、東京、岩波書店、1958年。

来は二つの意味を持っている<sup>2</sup>。一つは、地域によることばの違いを示す「地域方言」、すなわち、普段よく言われる「関西弁」「博多弁」「広島弁」といったものであり、もう一つは地域以外の話し手の属性と結びついたことばのバリエーションを意味する「社会方言」である。例をあげると、ジェンダー、年齢、職業などにもとづく「男ことば/女ことば」「女子高校生ことば/おじさん・おばさんことば」「博士ことば」「武士ことば」などたくさんある<sup>3</sup>。その中、日本語社会では、地域差が意識されやすく、同時に地域方言についての知識がわりあい広く共有されているという特色があるため、「方言」といえば「地域方言」を指すことが多いようであるということも田中が指摘した<sup>4</sup>。

方言が存在する理由は大きく分けて2つあると考えられている。一つは都で生まれた最先端のことばが地方に広まっていたが、地域が都のことばを覚えた頃に、都ではすでにその語がなくなり、別のことばになってしまう。今のように交通機関に乗り、気軽に移動できることと比べ、昔は交通の便が悪く自由に通えなかった。そのため、都との距離によって各地の方言が違うということである。このようなことばの伝播は水に投げた石と波紋の関係に喩える言い方もあり、「方言圏論」と呼ばれる<sup>5</sup>。つまり、南の鹿児島と北の青森の方言が似ている原因は、都を中心に同心円状に方言が残ることになるわけである。

二つ目は、かつては交通が不便だっただけでなく、今のメディア設備もなかったため、遠くの地域と交流できず、それぞれは国のような認識になり、方言が生まれたたということ。その結果として独自の文化を発展させ、自分にとって便利なことばを使い、隣の地域と異なる言語が存在することになる。

---

<sup>2</sup> 田中ゆかり、『方言萌え！？一ヴァーチャル方言を読み解く一』、東京、岩波書店、2016年。

<sup>3</sup> 金水敏、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、東京、岩波書店、2003年。

<sup>4</sup> 高知大学教育学部 日本語学研究 <http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/kougi01.html>

<sup>5</sup> 柳田国男、『蝸牛考』、東京、刀江書院、1930年。

数え切れないほどの種類がある方言は、さまざまな観点での分類したが、現在方言研究の分野でもっと多く利用されることが図1の東条操による分類図である<sup>6</sup>（東条操1954）。方言区画・方言区画図とも呼ばれている。この分類では、全国の方言は、まず、本土方言と琉球方言に大きく分かれる。本土方言は、東部方言、西部方言、九州方言に分かれ、東部方言は北海道方言・東北方言・関東方言・東海東山方言・八丈島方言に、西部方言は北陸方言・近畿方言・中国方言・雲伯方言・四国方言に、九州方言は豊日方言・肥筑方言・薩隅方言にそれぞれ下位分類されている。また、琉球方言は、奄美方言・沖縄方言・先島方言に下位分類されている。

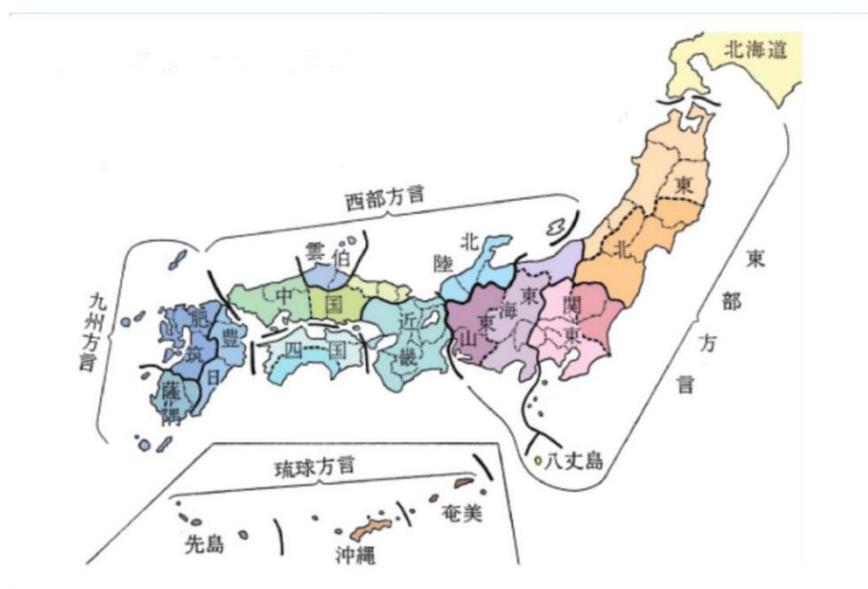


図1 東条操による方言区画

<sup>6</sup> 東条操、『日本方言学』、東京、吉川弘文館、1954年.

## 方言の「前世」と「今生」

日本の言語社会において、方言の歴史は非常に長く、人類が日本という国土に生きてきてから、各地特有の交際言語が生まれ、そして方言の雛形になった。方言のイデオロギーは大体4つの起伏のある発展段階を経て方言のイデオロギーに影響する要素も各段階で異なる。

### 明治維新以前

方言について最初の文字表記は奈良時代にさかのぼる。当時の『万葉集』14巻の「東歌」と20巻の「防人の歌」に収録された「東国の言葉」である日本東部方言は、当時の政治経済文化の中心である奈良で使われていた中央語とは全く異なる。これは当時の人々が方言の存在を意識していたことを示している。

武蔵野のをくき小岫がきざし雉立ち別れ去いにし宵よりせ夫ろにあ逢はなふよ（夫に逢っていないことだ）<sup>7</sup>

大君のみこと命かしこみ弓のみたさね共真寝か渡らむ長けこの夜を（長いこの夜を）<sup>8</sup>

その後の平安時代や鎌倉、室町時代には方言に関する文献はほとんど見られず、文学作品からのみうかがうことができた。例えば、『源氏物語』や『今昔物語集』には「東国の言葉」の記述があるが、これらの記述は当時の京都人が首都にいた優越感を頼りに、東部の方言に対し明らかな軽蔑の態度を持ち、「東部の方言はなまりが重く、言葉が乱暴だ」と東部の方言を下位に置いた。

<sup>7</sup> 『万葉集』、巻14 東歌、3375 番歌。

<sup>8</sup> 『万葉集』、巻20 防人の歌、4394 番歌。

声うちゆがみたる者<sup>9</sup>、常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣で、帰り給へるなり。初めも、こゝになむ宿り給へりし<sup>10</sup>

横ナハレタル音（なまった声）<sup>11</sup>

江戸時代初期になっても、日本の経済・文化の中心は京都・大阪周辺にあったため、「上方語」の「京言葉」は主流語として崇められた。江戸後期に中心が完全に移行するにつれ、江戸の文化が形成され、「東国の言葉」の位置づけも変わってきたようであり、そのなか、とくに江戸の言葉が上方の言葉に対抗する大きな勢力を持つにいたった。「江戸語」の時代が始まり、東西両方言が対立した。江戸時代の滑稽小説家、式亭三馬（1776-1822）の作品『浮世風呂』には、上方の女性と江戸の女性が互いに相手の方言を咎め立てした場面がある。上方の女性は江戸の女性の言葉について、

へ、関東べいが、才六をぜへろくとけたいな詞つきじやなア<sup>12</sup>

と述べている。ここでは「アイ」という連母音が江戸語で長母音「エー」となることをとりあげ、「けたいな詞つき」と評している。江戸の言葉を低く見る意識が見てとれている。これに対して江戸の女性も、

---

<sup>9</sup> ここでは、「声うちゆがみたる者」が「声がひどくなまっている者」を意味している

<sup>10</sup> 紫式部、『源氏物語』「宿木」の巻。

<sup>11</sup> 『今昔物語集』巻19-11。

<sup>12</sup> 式亭三馬、『浮世風呂』、1809-13年。

そりやそりや。上方<sup>かみがた</sup>も悪い悪い。ひかり人<sup>て</sup>ツサ。ひかるとは稲妻<sup>いなづま</sup>かへ。おつだネエ。江戸<sup>えど</sup>では叱<sup>しか</sup>るといふのさ。アイそんな片言<sup>かたこと</sup>は申ません<sup>13</sup>。

と述べ、上方の言葉で「シ」と「ヒ」とが交替することをとがめ立てている。そして上方の言葉をさして「片言」、つまりなまりのある言葉と言っている。

この時期は経済が遅れ、交通が閉塞し、相互交流が頻繁ではなかったが、地域優位性による方言優劣意識が芽生えた。特に政治の中心が移った後、差別を受けた東部の方言が眉をひそめ、イデオロギー的に西部の方言と並んで座っているという主張があった。江戸城の急速な発展につれ、江戸の人々は自分の方言に対する自信が大きくなり、「江戸語」こそ正統派であり、大いに広めるべきだと考えた。2つの勢力が拮抗する方言が現れると、優勝劣敗の苦戦は避けられないことを意味する。

## 明治時代から

1868年の明治維新は各業界に改革の波を巻き起こした。日本政府は早く富国強兵を実現するため、中央集権の進度を速めた。取った措置の一つは、全国的に方言を消滅させ、交流の統一を実現することである。文部省の国語政策機関に密接に関与した上田万年(1867-1937)は、日本を「一国家、一民族、一言語」とし、それが近代化に有利だとした<sup>14</sup>。統一体としての日本において国民間では言語が通じなければならないというイデオロギーが始まった。そればかりか、上田にとって国語は、日本に住む人々が使うことばのあるがままの姿ではなく、ラテン語と西欧近代語との関係にならって漢文と国語の関係を

<sup>13</sup> 式亭三馬、『浮世風呂』、1809-13年。

<sup>14</sup> 安田敏朗、『脱「日本語」への視座』、東京、三元社、2003年。

とらえた上での国語という言葉の理想像であり、それを作り出していくものとして国語学を要求した<sup>15</sup>。この文脈で、方言には、近代国民国家の均質をな空間を創出する上での障害要因としての停滞したと言うイメージと、「方言には古語が残る」として語られる日本語の起源をあらわすイメージとが同居し、排除と包接の両方の言説で語られてきた<sup>16</sup>。

「標準語」という概念について述べた最初の論文として知られるものに「標準語に就きて」がある<sup>17</sup>。そこでは、「教養ある東京人の話すことば」が「標準語」とされ、東京以外の地域や特定階層のことばより「超絶」した存在として位置付けられた。標準語政策の下で、方言撲滅運動は推進され、特に学校や軍隊における教育が重要な位置を占めている。

努めて標準語を用ひ、方言・訛語・卑語は避けざるべからず<sup>18</sup>

いずれも、「方言」は「標準語」に比して「劣るもの」という存在であり、「恥ずかしい」「隠したい」ものとして認識された。

## 戦後の高度経済成長期

一九四五年日本は無条件降伏し、占領後の「学習指導要領」には「共通語と方言の共存」のことを提起した。この試案では「標準語政策」に伴うイデオロギー色の強い「標準語」という語を、全国に通用することばという意味で「共通語」置き換えた。同時に、「学習指導要領」の試案が書いたように、「方言」の存在と使用の否定はしない態度が現れた。

<sup>15</sup> イ・ヨンスク、『「国語」という思想——近代日本の言語認識』、東京、岩波書店、1996年。

<sup>16</sup> 安田敏朗、『<国語>と<方言>もあいだ——言語構築の政治学』、京都、人文書院、1999年。

<sup>17</sup> 上田万年、『帝国文学』、帝国文学会、1885年。

<sup>18</sup> 中学校作法要綱、第5章、言語対応、1993年。

「方言を笑うな」というタイプの記事や投書が見えてきた。これも方言に対する当時の人々の劣等感を側面から見ることもできる。

東京人よ、方言を笑うな<sup>19</sup>

しかし、経済効率化のため、東京一極集中が推進され、その象徴である「標準語」「共通語」を運用する能力を獲得するのは何より重要だと思われた。この時期は社会全体から見れば、学校教育としても、家庭での教育でも、「標準語教育」「方言矯正」という考え方が依然として主流であり、各様な形で現れた。その中沖縄や九州地方における「方言札」という「罰札」の存在、神奈川県鎌倉市立腰越小学校始まり、全国的に多くの学校に広がる「方言」の使用を抑制する「ネサヨ運動」がよく知られるものとしている。地方出身者は方言蔑視を体験することであり、また、方言を話すだけで自殺、殺人などの事件が発生し、方言問題にからむ深刻な事態の規模が大きくなった。

方言をからかわれ、兄の婚約者絞殺 カットとなった予備校生<sup>20</sup>

方言が恥ずかしい」友達できず老夫婦自殺<sup>21</sup>

## 八十年代以後

1980年代に入ると状況は一変した。「方言」に価値を見出す考え方に基づく記事や投書が多くあらわれるようになっていく<sup>22</sup>。「方言」を用いたCM、テレビドラマ、文学作

<sup>19</sup> 朝日新聞、1957年5月28日（田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二七関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。）

<sup>20</sup> 読売新聞、1965年8月27日（同書。）

<sup>21</sup> 西日本新聞、1972年1月16日（同書。）

<sup>22</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二七関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

品を盛んに取り上げ、「方言」に対する態度も「笑うな」から「堂々しゃべろう」にだんだん変わった。

「すばらしい方言堂々しゃべろう」<sup>23</sup>

このターニングポイントが現れたひとつの原因は、この時期日本が経済成長を遂げ、地域主義を主張するスローガンである「地方の時代」を目指し、コントロールする中央集権の発想に挑戦しなかったことである。そのため、「地方のもの」「個性のもの」である「方言」は人々から支持を受けた。もうひとつは、日本語社会を構成する人びとの言語運用能力においても、共通語化がほぼ完了したことを受けて、多くの人、とりわけ若い世代を中心に方言と共通語のバイリンガルの時代を迎えたことが大きいと考える<sup>24</sup>。つまり、「標準語」や「共通語」は日本社会において、誰でも使える「面白くないことば」「普通のことば」となり、それに対し、誰でも言えることはない「方言」は「面白いことば」「スペシャルなことば」となった。こうして、「方言」が注目を集めつつ、消極的なものから積極的なものにシフトした。

さらに 90 年代後半からはインターネット、携帯電話の普及による、コミュニケーション形態の急速な変化も影響し、方言が前より腕を振るい始めた。2000 年代に入ると、「ニセ方言」を用いた「方言コスプレ」ブームを伝える記事や、「方言に萌える人」という表現も登場し、「方言おもちゃ化」の時代が当たり前の風景になりつつあることがうか

---

<sup>23</sup> 北海道新聞、1984 年 3 月 6 日（田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011 年。）

<sup>24</sup> 田中ゆかり、『「方言」が価値を持つ時代—— Stigma から Prestige、そして...』、都市問題、特集 1、2014 年、pp.9–11.

がえる<sup>25</sup>。2005年の夏から秋にかけ、日本のメディアが若い世代一特に首都圏とその近辺の女子高生・女子大生の間で自分の生まれ育った地域とは異なる全国各地の方言を会話やメールに織り込み、方言には「おしゃれ」「かわいい」「萌える」といった価値も加えられてきた「方言ブーム」が起きていると報じた<sup>26</sup>。このブームに応じて、伝統的な辞典と異なり、「遊ぼう」を目的として方言を学ぶための書籍が次々に刊行された。さらに、様々な話題を集めたCMや、テレビドラマ、アニメなどに続々登場した「方言キャラ」は、人気者として広く一般に受け入れられていく。その中、萌える対象として「方言」と結びつくジェンダーは一般的に「女子」と思われた場合が多いが、「男子」と結びつくのは絶対少なくない。「方言男子」も少女漫画やPCブラウザゲームなどに登場し人気を博している。



図2 『使える方言あそび』<sup>27</sup>



図3 『方言男子の作り方』<sup>28</sup>

<sup>25</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>26</sup> 国立国語研究所、『日本語ブックレット 2005』 [https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nihongo\\_bt/2005/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nihongo_bt/2005/)

<sup>27</sup> 『使える方言あそび』、東京、ブティック社、2006年。

<sup>28</sup> マツモトトモ、『方言男子の作り方』、東京、白泉社、2019年。





図5 アニメ『ゴールデンカムイ』<sup>31</sup>

また、2011年三月十一日の東日本大震災を契機に、東北から北関東にかけての「方言」にも大きな注目が集まるようになってきている<sup>32</sup>。「東日本大震災からの復興の基本方針」（平成23年7月29日）において、「『地域のたから』である文化財や歴史資料の修理・修復を進めるとともに、伝統行事や方言の再興等を支援する。」と明記されていることを受け、被災地における方言の再興を通して地域コミュニティの再生に寄与する取組を支援している<sup>33</sup>。

◆令和元年度

委託先	企画名
学校法人弘前大学 弘前学院大学	発信！方言の魅力 かたるびゃ・かたるべし青森県の方言2019 ・報告書 (10.1MB)
国立大学法人 岩手大学	おらほ井で語っべしプロジェクト次世代継承編2
国立大学法人 東北大学	被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開 ・報告書 (2.1MB)
国立大学法人 茨城大学	方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承2 ・報告書 (3.9MB)
株式会社エフエム会津	語り継ぎたい地域の物語Ⅲ～会津・浜通り～

図6 2019年方言復興の活動<sup>34</sup>

<sup>31</sup> 野田サトル（原作）、『ゴールデンカムイ』、東京、集英社、2014年-2022年。

<sup>32</sup> 田中ゆかり、『読み解き！方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

<sup>33</sup> 木部暢子、『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』、国立国語研究所、2011年2月。

<sup>34</sup> [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/kasseikajigyo/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/kasseikajigyo/index.html)

要するに、日本語社会において、「方言」の注目度が戦後から徐々に高くなり、「方言」に対する態度もネガティブなものからポジティブなものへと大きく変化してきた。今の時代は「方言」に価値を見出す時代と呼べるのだが、「方言」に対する意識変化の背景には様々な要因が存在している。次の章で「日本言語社会における言語イデオロギーの変化について論じて、「方言復権」の背後の原因を探していく。

## 第二章 日本社会における言語イデオロギーの変化

第19期国語審議会での「現代の国語をめぐる諸問題について」という報告書には、「現在、共通語は広く一般社会に普及していると認められるが、方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、それぞれの地域に伝わる豊かな表現を生活の中で生かしていくことは、言語文化の活性化にもつながるものである。共通語とともに方言も尊重することが望まれる」とある<sup>35</sup>。また、第20期国語審議会での「新しい時代に応じた国語施策」についてもこのように書いた：「全国的なコミュニケーションの基本は共通語である。従来の教育成果やテレビの普及などによって全国的に共通語が広まっているが、今後も両者が役割を分担しつつ共存していくことが望ましい姿であろう」<sup>36</sup>。

正しくないと言われるものが抑圧される時代も終わり、今の現代日本では思想や表現の自由は憲法によって保証されている。共通語は一般社会に普及している同時に、ひとつの言語現象が注目を集めている。第20期国語審議会での以下の「言葉のゆれ」ということに対して、ネガティブではない評価を与えた：「世間一般では今の国語の状況を「言葉の乱れ」ととらえることが多く、世論調査(平成4年総理府、同7年文化庁)においても「今の言葉は乱れている」と考えている人はおおむね7割を超えた。「言葉の乱れ」は、ある価値判断を伴ったとらえ方である。一人一人が自らの考える国語のあるべき姿に照らせば、そこから逸脱するものを「乱れを基本的れ」ととることも率直な態度であり、言葉に対する関心の高さゆえのことと思われる。ただ、国語審議会としては、言語の変化を客観的にとらえ、変化の過程で、ある語について新たに生じた別語形が従来の語形と並存する状態に

<sup>35</sup> ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63-82.

<sup>36</sup> [https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/index.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/index.html)

については、ここには言葉の「ゆれ」としてとらえた上で、現時点でのより適正な言葉遣いを考えていきたいと考える」<sup>37</sup>。

「言葉のゆれ」とは、ある語が変化する過程で、その語形等について、本来の形に対して拮抗する形が別に生じ、両者が並存する状態になったということである。「見る」を例としてあげると、共通語の可能表現において従来の「見られる」に並ラベ、「ら抜き言葉」の「見れる」も使われることは「見る」の可能表現の「ゆれ」である。しかし、「見られる」を本来の正しい形と見、「見れる」を否定する立場からは、この両形並存の状態は「乱れ」ととらえられる。すなわち、「ゆれ」は客観的な認識、「乱れ」は価値判断を伴った認識ということになる<sup>38</sup>。このようなことばの「変種」は日本語社会意において常に発生している。そして、新しいバリエーション・変種や言語革新が約4分の3の言語コミュニティで使用されると、共通語として受け入れられると指摘されている<sup>39</sup>。

規範的とされる標準語との間に齟齬が生じることを否定的に捉えた言葉である「言葉のゆれ」は今新たな目指しに見られることによって、1990年代から、言語に対する新しい態度と新しい用途がこれほどまでに拡散してきたということが見えた。さらに、21世紀以後、生育地の地域方言でもなく、固定的な属性の観点からは自身が属しているコミュニティ方言でもない社会方言などの変種・変異を着脱する「方言おもちゃ化」現象も指摘されていた<sup>40</sup>。日本人の言語イデオロギーは「一つの言語の単位であってその中では通じなければならない」から「言語を遊ぶ」まで天地を覆すような変化を遂げた。実は、過去30年間、日本の言語は脱標準化されてきて、非標準化は言語意識の変化、規範に対する

<sup>37</sup> [https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/01.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/01.html)

<sup>38</sup> 同 37

<sup>39</sup> INOUE, Fumio, Standardization and de-standardization processes in spoken Japanese, *Language Life in Japan: Transformations and Prospects*, London, Routledge, 2011, pp. 109–123.

<sup>40</sup> 田中ゆかり、『着脱される「属性」——方言「おもちゃ化」現象——』、2007年。

批判的な反省、言語使用の変化、および日本語使用者の多様化と増大する流動性などの内容を含む<sup>41</sup>。「方言コスプレ」もその一つの段階だと言える。この言語イデオロギーの変化の過程、そして背後の原因を探求するのは本章の目的である。ここでは、日本における言語の標準化から脱標準化へ徐々に見ていく。

## 標準化の流れ

日本における言語の標準化には通常、徳川幕府時代（1603–1868）に地元の氏族の首長とその家族は江戸（今の東京、具体的に言えば「山の手」）に住むことから始まった議論がある<sup>42</sup>。しかし、近代化を進めるために日本語を改良する必要があるという意見は幕末にもみられるが、議論が本格化したのは明治に入ってからである。言語の標準化の問題は、言語イデオロギーと深く結びついている<sup>43</sup>。その定義をいうと、言語のパターンと社会的かつ文化的な構造の間を架橋するよう基礎づけられた信念であり、「言語何であるか」についての思考体系となる<sup>44</sup>。ポール・クルスクルティ（Paul Kroskrity）によると、言語イデオロギーは、特定の社会集団の利害関係に基づいて構築された言語の認識と言論であり、特定の社会集団内の階級、ジェンダー、世代などの違いを反映し、人によってそれぞれの程度の認識があり、社会構造と個人の言語活動を結びつけるのである<sup>45</sup>。そして、集団間の言語の違いを表すイデオロギーが作り出される方法として、ドーア（2008）もジュ

---

<sup>41</sup> HEINRICH, Patrick, After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, *Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts*, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281-297.

<sup>42</sup> 野村剛史、『日本語スタンダードの歴史—ミヤコ言葉から言文一致まで—』、東京、岩波書店、2013年。

<sup>43</sup> ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63–82.

<sup>44</sup><https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A8%80%E8%AA%9E%E3%82%A4%E3%83%87%E3%82%AA%E3%83%AD%E3%82%AE%E3%83%BC>

<sup>45</sup> Paul Kroskrity, *Regimes of language: Ideologies, politics, and identities*, Santa Fe, School for Advanced Research Press, 2000.

デイス・アーバイン (Judith Irvine) とスーザン・ガル (Susan Gal) があげていた、①特定の集団や限られた行為をその社会全体の姿を代表するものとして扱う「アイコン化 (iconization)」、②イデオロギーにそわない人々や行為を矯正したり周辺に追いやったりする「抹消 (erasure)」そして③あるレベルでの二項対立を、他のレベルの関係にも当てはめる「フラクタル的再生産 (fractal recursivity)」<sup>46</sup>という三つの方法を指摘した。一見して政治や権力とは関係がないようなものである。

ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) も標準語に対応する公用語に一連の反省を  
持っている。公用語とは社会言語交換の中で最も重要であり、合法的な言語や言語的地位  
を正当化する言語であることが確認されている。いかなる言語でも、正当性のある地位の  
取得は非常に複雑で紆余曲折のある権利拮抗と競争過程を経験しなければならない。社会  
的権利の占有に優位性を持つ個人、集団、団体、その言語論述とその運用効果だけが言語  
交換の競争において正当化される資格と合法的地位を得ることができる<sup>47</sup>。例をあげる  
と、「言語」と「方言」の概念の違いは言語学的なものではなく、政治的なものによって  
決められるものである<sup>48</sup>。つまり、政治的な場で権利を持つ集団の言語変種は「言語」と  
なり、権利を持たないアンダードッグの言語変種は「方言」となる。そして、多くの社会  
では、「言語」を持つ政治的に有力な集団が、「方言」を話す政治的弱者に自分の「言語」  
を押しつけ、「方言」は「言語」に劣るものとするような言語イデオロギーでその押しつ  
けを正当化してきた<sup>49</sup>。幕府時代でも明治時代でもこの通りであろう。20世紀初頭に日本

---

<sup>46</sup> IRVINE, Judith & GAL, Susan, Language ideology and linguistic differentiation, Regimes of language: Ideologies, politics, and identities, Santa Fe, School for Advanced Research Press, 2000, pp.35-84.

<sup>47</sup> BOURDIEU, Pierre, language and symbolic power, Cambridge(MA), Harvard University Press, 1991.

<sup>48</sup> ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63-82.

<sup>49</sup> 田中克彦、『ことばと国家』、東京、岩波書店、1981年。ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63-82.

語を標準化しようと努力するまで、統一された日本語の口語は存在せず、東京にもこのような統一された言語は存在しなかった。言語の近代化と標準化の時期に、東京は大きな人口変化を経験した<sup>50</sup>。これらの移民は東京のために言語の多様性を増すと同時に、彼ら自身の言語も標準化され現在化されつつある<sup>51</sup>。1902年に首府であり、政治、経済、交通の中心である東京におかれる理由で、「東京の教育ある人々の言葉」が標準語とされ国語の内実が定められた<sup>52</sup>。標準言語に合わないものは何でも非難され、疑われ、絶滅の対象になる。「標準語」は良いもの、きれいもの（洗練されたもの）、そして生活語としての「方言」は悪いもの、汚いもの（かっこう悪いもの）といった形での指導が行われたのである<sup>53</sup>。また、当時の文学も統一された言語を広める上で核心的な役割を果たした<sup>54</sup>。夏目漱石をはじめとする文学者は言文一致の運動を始め、標準化の進行に影響を与えた。東京に住むエリート層は、これらの文学作品の表現方法を自分の話の手本にし始め、それを通じて上流階級を強固にし続けている。この言文一致運動は、「何をもって『言』（はなしことば）とするか」という問題から、話し言葉の標準を求めていくことになり、1880年代以降には上からの標準化を求める運動へと変わっていったとする<sup>55</sup>。

---

<sup>50</sup> HEINRICH, Patrick, *After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts*, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281-297.

<sup>51</sup> HEINRICH, Patrick, & YAMASHITA, Rika, *Standardization, ludic language use and nascent superdiversity*, *Urban Sociolinguistics*, London, Routledge, 2018, pp.130-147.

<sup>52</sup> ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63-82.

<sup>53</sup> 真田信治、『脱・標準語の時代』、東京、小学館、2000年。

<sup>54</sup> 同 51

<sup>55</sup> イ・ヨンスク、『「国語」という思想——近代日本の言語認識』、東京、岩波書店、1996年。ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63-82.

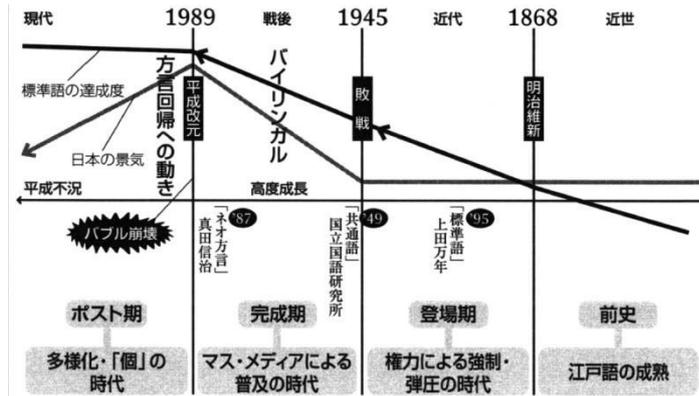


図7 標準化の過程<sup>56</sup>

標準的な日本語は日本全国に徐々に伝えられている。1945年までは標準語の習熟度は不均衡だったが、正確性の認識や標準語者の相手言語者の象徴的な支配が各地に広がり、一人一人に影響を与えた<sup>57</sup>。

現在のように「方言」と対立の意味で使う「共通語」という用語が全国で広く用いられるようになったのは、戦後のことである。民主的日本語政策の立案のための基礎データを得る機関として設立された国立国語研究所が、1949年に福島県白河市の住民の言語生活調査をしていた際、地域社会の言語生活が在来のいわば純粋土地ことばとそうでないものとの併用によって行われている実態が把握されたのである<sup>58</sup>。そこで分析にあたって、地域で話されている「全国どこにでも通じることば、東京語に近いが、必ずしも一致しない」ことばを「全国共通語」略して「共通語」とし、在来の土地のことばである「方言」と分けて扱ったのである<sup>59</sup>。その後、「共通語」という用語は、国語教育の指導者によって持ち込み、そして、「共通語」が「標準語」に代わって新時代語だという宣伝が盛んになっ

<sup>56</sup> 真田信治、『脱・標準語の時代』、東京、小学館、2000年。

<sup>57</sup> HEINRICH, Patrick, After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281-297.

<sup>58</sup> 同 56

<sup>59</sup> 国立国語研究所、『言語生活の実態：白河市および附近の農村における』、東京、秀英出版、1951年。

た。これは、戦前の「標準語」教育に対する嫌悪、すなわち、日本政府が「標準語」の普及にイデオロギーの教育をからませて強引に上から押し付けてきたことに対する反発である<sup>60</sup>。

## 脱標準化の開始

このように、ほとんどの日本人は小さい頃から標準語を学び始めるから、1950年以降状況は段々変わった。20世紀50年代から2011年までの日本東北地方の鶴岡市が行った長期調査によると、調査者の標準語能力は絶えず向上し、2011年までには全員が標準語を話せた。つまり、戦後の日本では、標準語を話すことが一般的になり、特に、1990年代から生まれた人は、標準語だけでコミュニケーションをとることが多い<sup>61</sup>。標準語の戦後日本での徹底的な普及により、言語資源と言語態度に根本的な変化が生じた。中青年世代は「方言を使うと限界がある」ということに不安を感じなくなり、標準語は現在、彼らが手間をかけずに使えることばになった<sup>62</sup>。多くの日本人はかつて方言使用者として面した言語の不安感から解放された。

1980年代、「国際化」の中で「ディスカバー・ジャパン」「ふるさと創生」などのスローガンを掲げ、「方言の復活」も言われ始めた。「個性」を重視する現在で、また、テレビの普及による準拠集団の切り替えから、ほとんどの人々が共通語に近い形でも話すようになり、新しい概念が生まれている。代表的なのは井上史雄に提出された、「新方言」と真田信治に提唱された「ネオ方言」という概念である。このような新概念の展開によっ

---

<sup>60</sup> 真田信治、『脱・標準語の時代』、東京、小学館、2000年。

<sup>61</sup> INOUE, Fumio, Standardization and de-standardization processes in spoken Japanese, *Language Life in Japan: Transformations and Prospects*, London, Routledge, 2011, pp. 109–123.

<sup>62</sup> 真田信治、『滋賀県今頭町、福井県上中町言語調査報告』、大阪大学文学部紀要、第36巻、大阪、大阪大学文学部、1996年、pp.31–64.

て、方言と共通語の違いはもはや言語システムの違いではなくスタイルの違いであり、場面によって使い分けるコード（公的な場面での「共通語コード」と私的な場面での「方言コード」としてとらえた<sup>63</sup>。

共通語化が進んでいるといっても、方言形から共通語形に交替することだけではなく、方言内部においてもいつも新しい方言の形が作り出されている。方言内部における変化の方向は二つある<sup>64</sup>。一つは言語内的な変化であり、それまでその方言の体系がもっていた言語変化の方向に従って変化を続けたこと。もう一つは言語外的な変化であり、他の言語と多く接触することによって変化すること。「新方言」は、1970年代に井上史雄によって提唱された概念であり、井上・鎌水（2002）での定義によれば、

- (1) 新しい世代が
- (2) 非公的場面で用いる
- (3) 非共通語形のこと

と単純されているのが特徴である<sup>65</sup>。「新方言」は後に叙述する「ネオ方言」との関係について多く議論されているが、それよりも1970年代の方言研究の時代の背景との関係が重要だと言われている<sup>66</sup>。この時代に、日本全国範囲で急速な共通語化が推進しているという状況の中で、「共通語形以外の語形が使用されるように事象」を発見したことが強調されるべき点だと指摘された。

---

<sup>63</sup> ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63-82.

<sup>64</sup> 東京外国語大学博士学位論文 <http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/51462/6/dt-ko-0105004.pdf>

<sup>65</sup> 井上史雄・鎌水兼貴、『新しい日本語』、東京、東洋書林、2002年.

<sup>66</sup> 同 64

「新方言」は「方言」であると言われているが、定義に地域差に言及していない。つまり、定義から見れば、非共通語形であることばはみな「新方言」に属するのである。そのため、これについて、井上は、地域社会において公的場面で用いられる表現は「地方共通語」をあげていても、その境界は曖昧になりやすいと指摘した。「地方共通語」は、ある地域という範囲において通用される方言であり、当地の人にとって方言に属していなく、文体的にも、方言と共通語の中間に位置すると考えられ、個人も「方言」「共通語」「地方共通語」を使い分けている<sup>67</sup>。この問題の「ネオ方言」と切り離せない関係がある。

「ネオ方言」は、「新方言」に近い概念であり、真田信治によって1980年代に提唱されていた：現在方言とされるものは、いわゆる「伝統方言」ではなく、共通語の干渉を受けた中間的言語変種であること。「新方言」の「新」と違う表現を表すために、「ネオ・ダイアレクト」とされていた<sup>68</sup>。「ネオ方言」と「新方言」の違いは大體二つの方面から指摘されたい<sup>69</sup>。まずは体系性の違い。「新方言」においては、現象同士の間で必ず結びがあるということは重視していない<sup>70</sup>。前に述したように、井上が「新方言」の定義に地域性を入れなかった。これは、伝播の方向性は、地域・世代・属性などの多次元に及び、一定の範囲を規定することが困難だからである<sup>71</sup>。

もう一つの違いは文体の高さである。「ネオ方言」は共通語と方言の両方の特性をもっているから、「新方言」の定義(3)「非共通語形のこと」と対立のような感じをさせる。こ

<sup>67</sup> 柴田武、『方言論』、東京、平凡社、1988年。

<sup>68</sup> 真田信治、『ことばの変化のダイナミズム—関西方言における neo-dialect について—』、言語生活、429、1987年、pp.26–32。

<sup>69</sup> 同 66

<sup>70</sup> 井上史雄・鎌水兼貴、『新しい日本語』、東京、東洋書林、2002年。

<sup>71</sup> 東京外国語大学博士学位論文 <http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/51462/6/dt-ko-0105004.pdf>

のことも、前述のように、井上はこのような公的な場面でも使用できる方言について、「地方共通語」と呼ばれている<sup>72</sup>。

こうして、これらの「新」「ネオ」という概念は、変化しないものとしての「伝統方言」はそれらの対立項を前提とされていて、他の地域からの借りやその地域のある階層に限られていた言い方によって全国範囲で広まっている。ここではこれらの現象をより明確に理解するために、いくつかの例を挙げて説明したい（これらの例は文献によって異なるカテゴリ（「新方言」か「ネオ方言」か）に分類されることがあるが、ここでは区別せずに見ていきたい。

## 沖縄の例

まずは、真田（2000）が言及したウチナーヤマトグチ（沖縄大和口）の例をあげたい。第二次世界大戦後、標準語（ヤマトグチ）を使ったメディアの普及や学校における標準語普及運動（方言札など）により、昔の方言話者は次第に高齢者に限られ土地の方言が分からない、もしくは聞けても話せない若者が増えた<sup>73</sup>。現在まで、沖縄の老年層の人たちは、「日本標準語と沖縄語を場面によって使い分ける言語生活」を暮らし、「そのための標準語教育が必要である」と考え、「自分でも標準語に自信がある」という意識をもっている<sup>74</sup>。それに対し、沖縄の若年層は、「日本語と沖縄語を使い分ける必要を特に感じない」と思っても、「標準語に自信があるわけでもない」という意識をもっている人たちが多いのである<sup>75</sup>。

<sup>72</sup> 東京外国語大学博士学位論文 <http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/51462/6/dt-ko-0105004.pdf>

<sup>73</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%81%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%83%88%E3%82%B0%E3%83%81>

<sup>74</sup> 真田信治、『脱・標準語の時代』、東京、小学館、2000年。

<sup>75</sup> 同書

沖縄の老年層世代が、「標準語に自信をもっている」原因は、戦前に「方言札」や「標準語奨励運動」などの経験があり、「方言」と「標準語」の使い分けに強く意識しているのである。一方、沖縄の若年層世代はそのような「縛り」から解放され、むしろ標準語からもっと遠く離れるんだと言えるだろう。また、米軍統治によって本土との交流が断たれたことで、言葉本来の意味とは異なる独自解釈や誤読が訂正されることなく定着したことなどによって、伝統的な方言と標準語のどちらでもない新しい方言とも言える「ウチナーヤマトグチ」と化していった<sup>76</sup>。

具体的な例を取り上げよう。

上等（じょーとー）は、「優れたもの、りっぱなもの、優秀なもの」という意味であり、沖縄では、「じょーとー」の範囲がより広く、普通より良ければ「じょーとー」であり、広い意味を持つ便利な言葉として使われている。主にものに対して使われ、非常に品質の高いものをいい、普段あまりに言わない言葉のようだが、沖縄では、かなり頻繁に「じょーとー」が使われ、「いいんじゃないの～」の代わりに「じょーとー、じょーとー」と言っている<sup>77</sup>。そして、ものに対してだけではなく、

- ・「あの子の性格、じょーとー・よお」
- ・「今度、親を旅行に連れて行くんですよ」

のような行為に対しても「じょーとー・さあ」も答えできる。病院に行く時、医者に「じょーとー」と言われても、「あなたがとても健康ですよ」という意味ではなく、まあまあ

---

<sup>76</sup><https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%81%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%83%88%E3%82%B0%E3%83%81>

<sup>77</sup> <http://i-uchina.com/emotional/post4628/>

程度の健康というくらいのニュアンスがある。また、「しょーとー」にも、英語でいう「Don't mind」、「気にするな」という意味で使われる。

- ・「失敗したけど、その経験はしょーとーであり、これからの人生の役に立つよ」

というふうに感じられている。また、最近の沖縄の若者は、「しに」ということばをよく使っている。「しに」は標準語でいうと「とても、かなり」等意味を強めるときに使うことばと同じ意味を持つ方言である。「しに」の語源は「死ぬほど」と言われていて、「死ぬほど〇〇だ」ということばに言い換えられる。「しに楽しいやっさー」「しに痛い」「しにおいしい」という言い方は「とても楽しいな」「まじ痛い」「超おいしい」の意味で使われている<sup>78</sup>。

「しに」とよく似た意味を持つ方言で「デージ」という方言がある。語源は、「大事」からきている言葉と言われる。「すごく」という意味であり、他にも「大変なこと」「一大事」などの意味がある。基本的に、いろんなことばと合わさって、そのことが比較的優れていることを表している。沖縄に行くと、必ず「でーじちゅらかーぎー」「でーじちゅらかーぎー」ということばが見える。それは「すごく美人だね。」「すごく可愛いね。」という意味である。「ちゅら」という方言は、「ちゅら海、めんそーれ」などの形で沖縄ツアーのパンフレットには必ずある。その意味は「美しい」であり、「でーじ」がついて強調され、結果「すごく可愛い・美しい」と、女性を誉める言葉になる。また、「でーじ」が、もう少し深く相手に関わっていくようになると「でーじな」へと変わる。

- ・「明日は、地域の掃除さ」

---

<sup>78</sup> <https://meaning-book.com/blog/20190114152102.html>

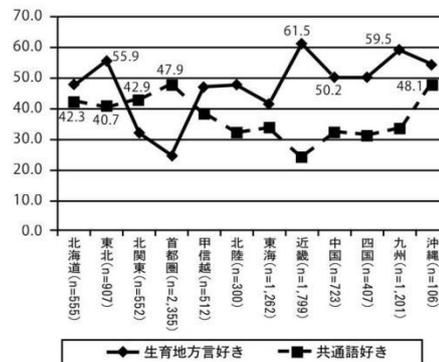
「でーじなことさ。お疲れさん」(それは大変なことだね。ご苦労さん)

「でーじなとんさあ。ちばりよ」(大変なことになったね。がんばりなさいよ)

と少し相手の気持ちに踏み込むことができる<sup>79</sup>。

## 関西の例

標準語は東京の言語を基礎にして伝播と教育を行ってきたが、標準化の過程で受け入れの程度は異なり、つまり日本では統一されていないのである。関西における人々は標準語が正しい、自分の言葉は間違っているとは信じられないという言語イデオロギーを続いている<sup>80</sup>。先行研究<sup>81</sup>でも関西弁話者の方言意識が他の地域に比べて高いことがわかっている。



生育方言と共通語「好き」の地域差

図 8<sup>82</sup> 生育地方と共通語「好き」の地域差

<sup>79</sup> <https://meaning-book.com/blog/20181023100438.html>

<sup>80</sup> HEINRICH, Patrick, Dialect cosplay. Language use by the young generation. Being Young in Super-Aging Japan, London, Routledge, 2018, pp. 166–182.

<sup>81</sup> 田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫『国立国語研究所論集：一万人から見た最新の方言・共通語意識』repository.ninjal.ac.jp、2016年。

<sup>82</sup> 同研究

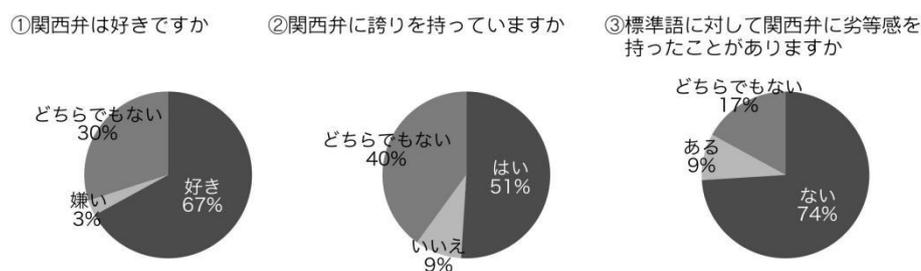


図9<sup>83</sup> 関西弁に対する感情

同時に、関西弁話者も知らず知らずのうちに標準語を使っていたり、関西弁が変化していきたりする<sup>84</sup>。標準語化する理由で、「新方言」も増加している。その中、主流として関西地域で使われている「新方言」は主に以下のことである<sup>85</sup>。

新方言	本来の方言	作る出された流れ
・こーへん	けーへん きーひん	こない+けーへん
・いかへん	いけへん (行かないの意味)	いかない+いけへん
・わからんくなった	わからへんようになった	わからなくなった+わからん
・しちゃう	してまう	もとは東京のことば
・アオタン	あざ	もとは北海道のことば

2018年の調査結果によると、やく3割~6割の人が「新方言」を使っており、「新方言」の使用率は非常に高いことがわかっている。

<sup>83</sup> 大阪教育大学付属天王寺中学校自由研究、第43集、2018年。

<sup>84</sup> 同研究

<sup>85</sup> 同研究

また、「新方言」は特定の地域のみで広まる新語も含めっている。例えば、マクドナルドを略して呼ぶ時の地域差がある。「マクド」という新語は関西地方と四国地方の一部で、マクドナルドの略語として使われる言葉である。他地域で略語表現される場合「マック」と呼ばれるケースが多いため、新方言の一種と言える<sup>86</sup>。そして、四国地方で「マクド」が用いられている理由は、関西地方との方言的・文化的親和性によるものであると同時に、愛媛県に本拠地を置くドラッグストア「mac」との混同を避けるためであるとされている<sup>87</sup>。

こうして、人々は方言に対する態度を変え、方言への賞賛が高まり続け、方言の汚名化の影から出てきた。2000年に入ると、新しい用途における言語の使用は「娯楽」の態度であることを指摘され<sup>88</sup>、まさに「おもちゃか」の時代を迎えた。言語の非標準化はもはや新しいシステムをもたらすとはみなされず、既存のシステム内で絶えず、常に自発的な革新をもたらし、言語行動はいつでも変化する言語態度を反映しているからだ<sup>89</sup>。今日では、標準化には「かっこよさ」「自発性」「革新性」的な言語スタイル化が関係しており、その中で「かっこいい」はすでに「正しい」に取って代わって<sup>90</sup>、特にすべての1990年代に生まれた若者にとって、「かっこいい」ことばは「正しく話す」や「権威的に話す」とは大きく異なり、原則的に「反逆的な態度」であり、社会の主流のことばに合法性がないという信念を表しているからである<sup>91</sup>。このような言語の使用には、権威の源と正確性

---

<sup>86</sup> <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%96%B9%E8%A8%80>

<sup>87</sup> 同 86

<sup>88</sup> 田中ゆかり、『着脱される「属性」——方言「おもちゃ化」現象——』、2007年。

<sup>89</sup> HEINRICH, Patrick, After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, *Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts*, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281–297.

<sup>90</sup> MAHER, John C, Metroethnicty, language and the principle of cool. International, *Journal of the Sociology of Language*, Berlin, De Gruyter Mouton, pp.83–102. HEINRICH, Patrick, After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, *Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts*, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281–297.

<sup>91</sup> POUNTAIN, Dick & ROBINS David, *Cool Rules: Anatomy of an Attitude*, London, Reaktion Books, 2000.

の概念から距離を置く必要があり、むしろ権威、正確性、合法性に基づいたシステムとやり方を茶化すことであり、そして、かつて言語標準化の過程で抑圧されていた言語の変化は、現在では「かっこいい」ことばを表現する有力な手段となっている<sup>92</sup>。

「方言」を「おもしろいもの」「楽しいもの」とみる「方言おもちゃ化」のあらわれのひとつである「方言コスプレ」という現象は現在人々の注目を集めたのである。この文脈では、方言は「装飾品」として、標準語化の社会教育を受ける前のように、「非公式的」「地方的」「無標識的」な言語で使用されていた方言と同じ、符号学が明確ではないのである<sup>93</sup>。第3章から、「方言おもちゃか」の本質からはじめ、この遊び的要素を含む属性着脱現象のひとつ「方言コスプレ」というものを見ていきたい。

---

(続く) HEINRICH, Patrick, After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, *Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts*, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281–297.

<sup>92</sup> 同 90

<sup>93</sup> 同 89

### 第三章 「方言おもちゃ化」、 「方言コスプレ」と 「方言ステレオタイプ」

#### 方言おもちゃ化

真田信治（2000）によると、人間が話すことばには、相反する二つのモーメントが働いている。一つは、スムーズなコミュニケーションを意図し、他人のことばの差をできるだけ小さくしたいという欲求である。標準語の集中（Convergence to Standard）はその一つであり、言葉のブランド指向である。一方、人間には、他人と同じでは満足できずに、個性ある新鮮な表現をしたいという欲求もある。これが標準からの逸脱（Divergence from Standard）の動きを助長すること。若者語などはまさにそれである<sup>94</sup>。

現代方言は、すなわち、「システム」から「スタイル」に変貌してる。その機能も「思考内容の伝達」から「相手の確認と発話態度の表明」へと変化しつつあり、現代方言の機能は概念の伝達という言語の本質的な部分を離れ、心理的なメッセージの提示に重心が移ってきていると言える<sup>95</sup>。そして、このようなスタイル化を果たした現代方言は、もはやスタイルとも呼ばず、共通語にちりばめられる心理的要素になることを、ファッションの修飾要素になぞらえ、さらに「アクセサリー化」へと向かおうとしている<sup>96</sup>。

この「方言アクセサリー化」現象は、話者自身の生育地域の方言を中心とし、田中ゆかり（2007）で「ジモ方言」の前段階の用法だと指摘した<sup>97</sup>。この「ジモ方言」は田中が提出した「方言おもちゃ化」の時代である現代における方言使用の3層のひとつである。

<sup>94</sup> 真田信治、『脱・標準語の時代』、東京、小学館、2000年。

<sup>95</sup> 小林隆、『アクセサリーとしての現代方言』、社会言語科学、第7巻1号、2004年、pp.105-107.

<sup>96</sup> 同研究

<sup>97</sup> 田中ゆかり、『着脱される「属性」——方言「おもちゃ化」現象——』、2007年。

・第1層「生育地方言」：自分の生育地の方言で自分自身が普段親密コードとして使用している方言

・第2層「ジモ方言」<sup>98</sup>：自分の生育地の方言だが、自分は使用しておらず祖父母世代が使用しているのを見聞きしているような「より濃厚な方言」

（「土地」と結びつきを持つヴァーチャル方言）<sup>99</sup>

・第3層「ニセ方言」：「非生育地の地域方言」

（「土地」と結びつきを持たないヴァーチャル方言）<sup>100</sup>

このなかで注目すべきは第3層の「ニセ方言」である。「ニセ方言」は第2層「ジモ方言」の人工的な側面をより強化した親密コードであり、「役割語」として定着しているツクリモノ「方言」のイメージを属性として臨時的に着脱させる機能をもっている<sup>101</sup>。後述する「方言コスプレ」はまさにそのひとつの現象である。

ここで田中（2011）で言及した2004年首都圏の大学に通う大学生を対象とした携帯メールに関するアンケート調査のデータを引用したい。このアンケートは東京の二つの私立大学に通う大学生を対象とし、「方言コスプレ」行動が流行としている前の方言意識を調査したのである<sup>102</sup>。

---

<sup>98</sup> 「ジモティ（地元人）方言」の略

<sup>99</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二七関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>100</sup> 同書

<sup>101</sup> 田中ゆかり、『着脱される「属性」——方言「おもちゃ化」現象——』、2007年。

<sup>102</sup> 同 99

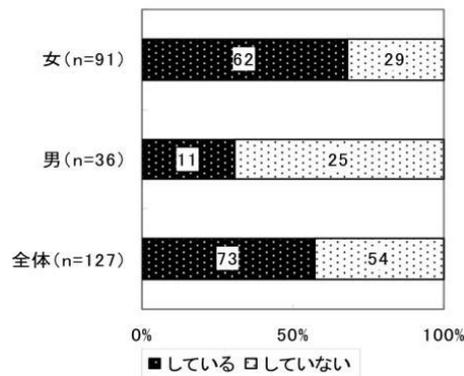


図 10 携帯メール特有表現を使用しているか<sup>103</sup>

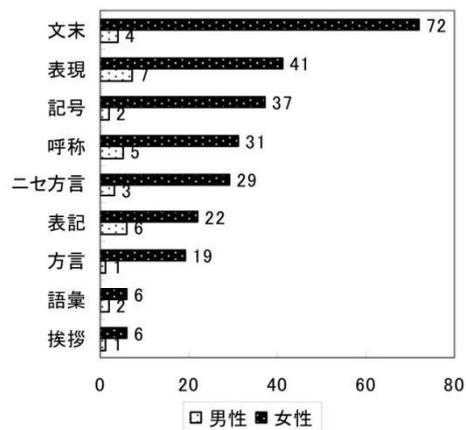


図 11 どのような特有表現を用いているか<sup>104</sup>

結果からみると、まず、全体から見れば、携帯メール特有表現を使用している人は絶対  
 少なくない。そして、特有表現について、「文末表現」が最もよく用いられていており、  
 ついでに「定型表現」「記号」「呼称」「ニセ方言」が使用されている。その中、「文  
 末表現」は「キャラ助詞」<sup>105</sup>とされ、「役割語」と強く関連している。「ニセ方言」の使  
 用はほとんど「～やん」「～だべ」「～たい」のような「文末表現」や、「なんでやねん」

<sup>103</sup> 田中ゆかり、『着脱される「属性」——方言「おもちゃ化」現象——』、2007年。

<sup>104</sup> 同研究

<sup>105</sup> 定延利之、『ささやく恋人、りきむレポーター』、東京、岩波書店、2005年。

のような「定型表現」である。つまり、「素の自分」とは異なる別のキャラを演出する（自分装い表現）ための表現が首都圏大学生に多く選択されていることがわかった<sup>106</sup>。

しかし、今回の調査相手はただ首都圏にいる大学生であり、このような「方言おもちゃ化」の感性は、全国的な現象として捉えられるのだろうか。非首都圏生育者においても、「ニセ方言」の使用は確実に存在するかどうかという問題について、2009年山形県三川町に実施したアンケート調査（日本大学文理学部人文科学研究共同研究）を見ていく。

三川町は「方言の里」として知られ、国立国語研究所（1953年・1974年・1994年・2007年）により、ここは共通語化が進んでおり、「方言」と「共通語」の使い分けが進行している。三川町は伝統的方言の残存度が高いと推測される地域で、東北地方における「方言主流社会」の典型と見られる<sup>107</sup>。町に居住する中学生以上の男女265人を調査した結果は以下の通りである。

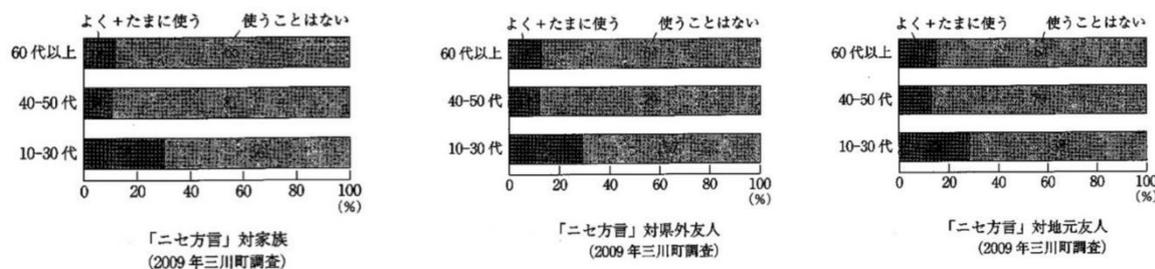


図12 三川町における「ニセ方言」の使用<sup>108</sup>

<sup>106</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>107</sup> 同書

<sup>108</sup> 同書

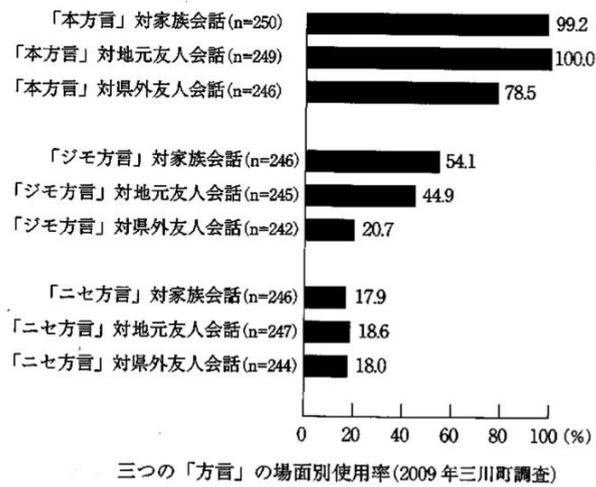


図 13 三つの「方言」の使用<sup>109</sup>

この二つの図を見れば、「方言主流社会」の三川町において、「ニセ方言」の使用はどの場面でも弱く、「本方言」「ジモ方言」に比べると使用率は低いが、「ニセ方言」の使用は確実である。つまり、「ニセ方言」の使用は、首都圏のような「共通語中心社会」だけで起こる現象ではないことが確認された。また、「ニセ方言」の使用は、若年層に多く観察された。このような若年層ほど「ニセ方言」を受け入れる傾向は、福岡県いわき市における三世代調査からも確認された<sup>110</sup>。

このように、「ニセ方言」、あるいは「ヴァーチャル方言」を用いる「方言コスプレ」という言語行動は、「方言おもちゃ化」現象のあらわれで、日本全国範囲で流行している。これからは「方言コスプレ」現象を中心とし、その本質、そして応用の方法について分析していく。

<sup>109</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>110</sup> 大橋純一、『方言使用の効用—その世代的位置と特性—』いわき明星大学人文学部研究紀要、二四、いわき明星大学人文学部、2011年。田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—ニセ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

## 方言コスプレ

先述した通り、今日のコミュニケーションでは、「何を伝えるか」よりも「どう伝えるか」が重要視されている。このような時代の日本語社会では、発話の意図をやんわりと伝えられるという幻想を共有できる「方言」が注目されていることが当然だと言えるだろう。近年、「方言」を用いたコミュニケーションとして前景化してきた用法に「方言コスプレ」という言語行動がある。関西人でもないのに、「なんでやねん!」と突っ込む、東北人でもないのに、「素朴」を演じながら「ズーズー弁」を喋る、九州人でもないのに、「お前なことバリすきったい」と「男らしく」告白する。特にマスメディアなどにおいて、このような「方言」を用いて「〇〇人」を「仮装」している現象はヒットになる。田中ゆかりはこの「ことば遊び」としての流行現象は「方言コスプレ」と定義する<sup>111</sup>。

「方言コスプレ」は、話し手自身が本来身につけている生まれ育った土地の「方言」とは関わりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての「〇〇方言」を、そのばその場で演出しようとするキャラクター、雰囲気、内容に合わせて臨時的に着脱することを指している<sup>112</sup>。

つまり、先に挙げた例のように、ある場合、ある目的を達成するために・ある効果を発揮するために、「関西人」「東北人」に扮し、そしてその「〇〇人」「〇〇キャラ」に当てはまる「方言」をつけたりする。ここで注意すべきは、「方言コスプレ」をするために、演出したいその地域の人びとを使うことば（先行研究では「リアル方言」と呼ぶ）を身につける必要はなく、会話の時に相手に「〇〇弁」を話す「らしさ」を感じさせるだけで良いのである。このように現実の土地と結びついたほんものとは別の「方言」のことを「ヴ

---

<sup>111</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>112</sup> 同書

ァーチャル方言」と呼ぶにする<sup>113</sup>。このような「リアル方言」を意図的な編集・加工を施すことで得た「ヴァーチャル方言」を用いた発話者のキャラの着脱行動は金水、田中の用語で、それぞれ「役割語」「キャラ助詞」の着脱で解釈するのであるが、いずれの解釈においても、「ヴァーチャル方言」によって「〇〇弁」のイメージだけでなく、「〇〇弁」を話す人びとのイメージ、そしてその「〇〇弁」が使われている地域のイメージも喚起させるということを指摘している。このように頭の中で喚起された様々なイメージが混ざって最後に現れるものを「方言ステレオタイプ」と呼んでいいと思う。すなわち、「方言コスプレ」とは、「ヴァーチャル方言」とそれと結びついた「方言ステレオタイプ」を用いたキャラ繰り出し演出である。

「ステレオタイプ」とは、「多くの人に浸透している固定観念や思い込みのこと」で、アメリカのジャーナリスト・政治評論家であるウォルター・リップマン（1889-1974）の代表的著書『世論』（1922）の中で提唱された概念であり<sup>114</sup>、特に社会心理学、社会言語学においてよく言及されている。ステレオタイプは、特定の文化があらかじめ類型化され、社会的に共有されている固定観念から生まれたものである。「男性は理系・女性は文系」「アメリカ人は自己主張が強い」「イタリア人はよくパスタやピザを食べる」など私たちの周りにはよく知られている例がたくさんある。ここ数年、ステレオタイプが原因として、ニュースやSNSでも話題になった男女の働き方に対する不公平感や性差別の問題が大きく取り上げられるようになってきた。ステレオタイプに依存することで、情報処理を簡略化できる同時に、誤った認識をしてしまう可能性が高まる。

---

<sup>113</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>114</sup> <https://sports-for-social.com/3minutes/stereotype/>

ステレオタイプの言語的側面に重点を置いた研究としては、「女性語」「男性語」の区別が社会言語学の分野で比較的よく研究されている<sup>115</sup>。これも先あげた例のように、昨今のジェンダー研究の高まりに関係ある。それ以外に他の角度からステレオタイプの言語を研究する存在は少ない。「ヴァーチャル方言」と結びついた「方言ステレオタイプ」については「関西弁」以外の研究があまりない。例えば、金水の研究によると、江戸時代後期の戯作において「関西弁」のステレオタイプはすでに「かなり完成されたもの」であり、近代以降のマスメディアによって増幅され拡散された結果、こんいちのような「関西弁」ステレオタイプが定着するに至ったとしている<sup>116</sup>。つまり、現代日本語社会における「方言ステレオタイプ」の形成には、マンガ、小説、映画、アニメ・ドラマ・CMなどのテレビ番組のような種々のメディアにあらわれる作品で使われる「ヴァーチャル方言」に切り離せなく関わっている。マイボイスコム (MY VOICE) は2009年9月1日から5日までの間にインターネット経由で行われた有効回答数は1万3976人の調査<sup>117</sup>『必要なものについてどこから情報を得るのか』の結果によると、情報源としてもっとも多くの人が用いているのは「テレビ」という結果が出た。8割近くの人が「テレビ」と答えている。このデータから見ればテレビが大きな影響力を持つメディアであることがわかった。

---

<sup>115</sup> 金水敏、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、東京、岩波書局、2003年。

<sup>116</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>117</sup> <http://www.garbagenews.net/archives/1060031.html>

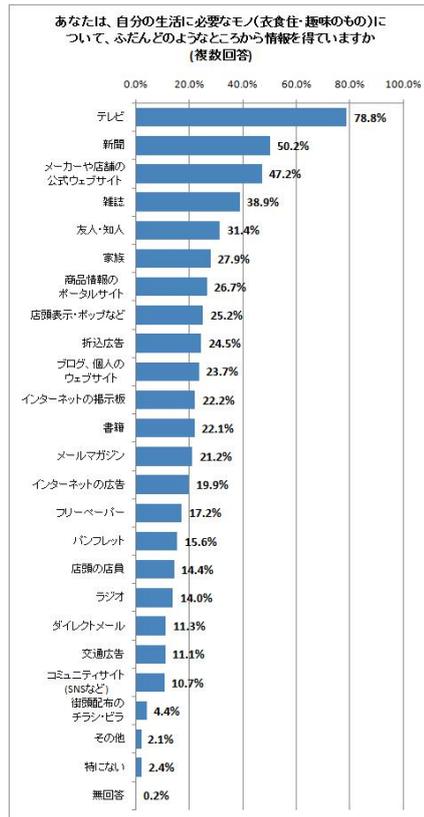


図 14 「必要なものについてどこから情報を得るのか」

## 方言イメージ調査から見る結果

さて、具体的にはどこの地域がどんな方言イメージを持っているのだろう。これから二つの方言イメージに関する調査データから「方言ステレオタイプ」を見ていきたい。

一つ目は田中による首都圏の大学生たちを対象に 2007 年に実施した調査である。調査対象の学生は 265 人であり、調査方法は「方言ステレオタイプ」に相当する 14 種類のイメージ語（おもしろい、つまらない、かわいい、かわくない、かっこいい、かっこわるい、男らしい、女らしい、洗練されている、素朴、あたたかい、冷たい、こわい、やさしい）に対し、そのイメージ語に適合する「方言」を 47 都道府県から選択してもらうということである。

地域	都道府県	おもしろい	かわいい	かっこいい	あたたかい	素朴	怖い	男らしい	女らしい	洗練されている				
										やさしい	つまらない	かわいくない	かっこわるい	
東日本	北海道				△	△					△			
	青森	△			△	■							△	■
	茨城					△							△	
	東京			△			△			◎	■	■	■	■
西日本	京都		■	■	△	△			■	■			○	
	大阪	■	△	■				○						△
	広島			△				○	■					
	福岡								○					
	熊本								△					
	鹿児島								○					
	沖縄	○	△			■	△							■

◎：20%以上，○：10%以上，△：5%以上が選択。白黒反転は第1位。

図15 14種類のイメージ語に適合する「方言」（2007年調査）<sup>118</sup>

二つ目は2010年に国立国語研究所による十六歳以上の全国に居住している男女を対象にする全国方言意識調査である。調査対象の数は4000であるが、1347人の回答が得られた。2007年の調査と同じ、8種類のイメージ語（おもしろい、かわいい、かっこいい、あたたかい、素朴、怖い、男らしい、女らしい）を提示し、そのイメージ語に適合する「方言」を47都道府県から選んでもらう方法を用いた。

三つ目は2015年に全国各地に居住する二十歳以上の男女からWebアンケートで行われた方言意識Web調査である。その中には有効回答数は10689であり、8種類のイメージ語は2010年と同じだった。

<sup>118</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

地域	都道府県	おもしろい	かわいい	かっこいい	あたたかい	素朴	怖い	男らしい	女らしい
東日本	〈東北〉	△			○	■			
	青森	○				○			
	秋田					△			
	東京				■				
西日本	京都		■		△				■
	大阪	■		△			■		
	広島							△	
	高知							△	
	〈九州〉							■	
	福岡							△	
	熊本							△	
	鹿児島							○	
	沖縄	○				■			

◎：10%以上，○：5%以上，△：3%以上が選択。白黒反転は第1位。

図 16 8種類のイメージ語に適合する「方言」（2010年調査）<sup>119</sup>

まとめて三つの調査の結果（図 15、図 16、図 17）を見ると、共通点が明らかに示している。首都圏の大学生であれ一般人であれ、彼らの「方言ステレオタイプ」の全体的な傾向は基本的に一致している。異なる傾向を見せる部分もあるが、これが回答者の居住地や属性、そして実施時期によると考えられる<sup>120</sup>。

共通点から見れば、まず、提示語によって喚起された地域はかなり限られたものである。つまり、特定のイメージ語と結びつく「方言ステレオタイプ」の強い「方言」は限定的であり、さらに全国的な程度で共有されている。回答された地域の中で、いつも「青森」「東京」「京都」「大阪」「広島」「福岡」「熊本」「鹿児島」「沖縄」という九つのがあ

<sup>119</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>120</sup> 同書

イメージ語	おもしろい	かわいい	かっこいい	温かい	素朴	怖い	男らしい	女らしい
[B]地域ブロック都道府県								
[B]北海道				△	○			
北海道				△	○			
[B]東北		○		○	●			
青森				○	○			
岩手				○	○			
宮城				△	○			
秋田				△	○			
山形				△	○			
福島				△	○			
[B]北関東		○			○			
栃木					○			
茨城					○			
[B]首都圏			○		x			
東京			●		x			
神奈川			○					
[B]甲信越				△	○			
新潟				△	○			
山梨				△	○			
長野				△	○			
[B]北陸				△	○			
富山				△	○			
石川				△	○			
福井				△	○			
[B]東海		○						
愛知								
知多								
[B]近畿	○	△		△	x	○	△	●
京都								
大阪	○							
兵庫								
[B]中国							○	△
広島								
[B]四国					△			△
愛媛								
高知								
[B]九州		△		△			○	●
福岡				△				
熊本				△				
宮崎				△				
鹿児島				△				
[B]沖縄	○				○			
沖縄県					○			

白黒反転：選択率1位  
 ●：20%以上，○：10%以上，△：5%以上  
 ※「素朴」選択率20%以上，5%未満(x)のみ表示

図17 8種類のイメージ語に適合する「方言」（2015年調査）<sup>121</sup>

る。それぞれの組み合わせを整理すると、「素朴」と「青森方言」、「かっこいい」と「東京方言」、「かわいい」と「京都方言」、「おもしろい」と「大阪方言」、「あたたかい」と「沖縄方言」、「怖い」と「大阪方言」「広島方言」、「男らしい」と「九州方言」、「女らしい」と「京都方言」になるという。

また、具体的に見ると、「方言ステレオタイプ」に当てはまるイメージ語が一番多いのは「大阪」であり、「おもしろい」「かっこいい」「怖い」「男らしい」として選択される傾向にある。この結果は、金水（2003）が研究した「関西弁」が持つ七つのステレオ

<sup>121</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

タイプ「冗談好き、笑わせ好き、おしゃべり好き」「けち、守銭奴、拝金主義者」「食通、食いしん坊」「派手好き」「好色、下品」「ど根性」、「やくざ、暴力団、怖い」と重なるところが多い<sup>122</sup>。

「東京」が「東京方言」としてあらわれてくる理由は、その選択者が主として非首都圏生育者であるから「全国共通語」が「東京方言」と捉えられているためであること<sup>123</sup>。2007年調査において「かっこいい方言」は「大阪」だが、次の二つの調査では「東京」が抜き返した。これは調査対象者の居住範囲はさらに広がったことは原因だと思う。そして、2007年調査では「つまらない」「かわいくない」「冷たい」においての一位が全て「東京」である。これも八十年代から「方言」の価値が上がる証拠の一つだといえる。

そして、2015年調査では急に東北と北関東の地域についての答えは増えていた。これは多分東日本大震災と関わっている。東日本大震災からの復興の一環として、方言保護の話題が絶えず人々の視野に入っていて、これも東部地域の方言を知る良い機会になるといえるだろう。

では、「方言ステレオタイプ」の強い「方言」はなぜ限られているのかというと、それはこれらの「方言」は人々の日常生活に現れる頻度が高いからである。つまり、露出度の高い「方言」は「方言ステレオタイプ」が強いということである<sup>124</sup>。2015年全国方言意識調査 Web 調査の質問に続いてのは、いくつかの選択肢を示して「上の質問で尋ねた方言についてのイメージに影響を与えたものは何だと思えますか」という質問である。その結果は図 11 のように示している。

---

<sup>122</sup> 金水敏、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、東京、岩波書局、2003年。

<sup>123</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>124</sup> 同書

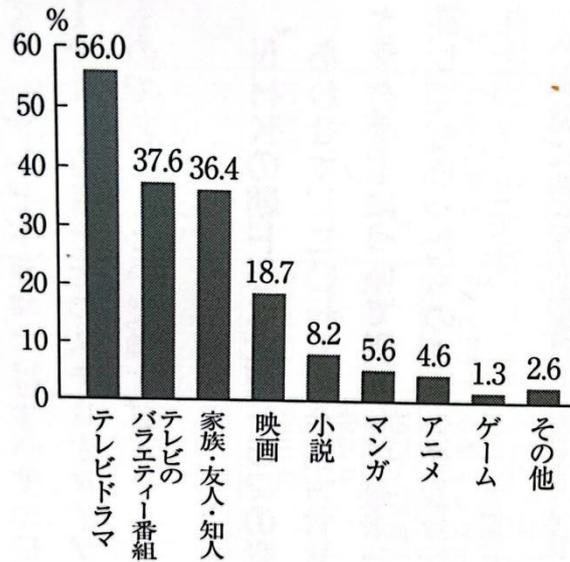


図 18 2015 年調査 「方言イメージに影響を与えるもの」<sup>125</sup>

一位は「テレビドラマ」、次は「テレビのバラエティ番組」、三番目は「家族・友人・知人」という回答であった。その中で、「テレビドラマ」を選択した人は半数を超えて、「方言ステレオタイプ」に対する影響の大きさが見える。例えば、NHK 連続テレビ小説から見れば、1961 年に放送開始し、今作で 105 作目である。22 年後期『舞い上がれ!』まで入れると、舞台地は合計 218 に及ぶ。1961 年度放送第一作、北沢彪主演『娘と私』の東京から始まり、80 作目の『つばさ』で 47 都道府県一巡を達成した。主要舞台の分布は図 12 のように示している。朝ドラにおいても、「北海道」「東京」「関西圏」である「大阪」「京都」「兵庫」そして「広島」「九州」の「福岡」の登場回数が多い。他には田中（2016）では小説・マンガ・ドラマのコンテンツに共通していた、「首都圏・関西圏が多く出現する」といった傾向を指摘した。

<sup>125</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011 年。

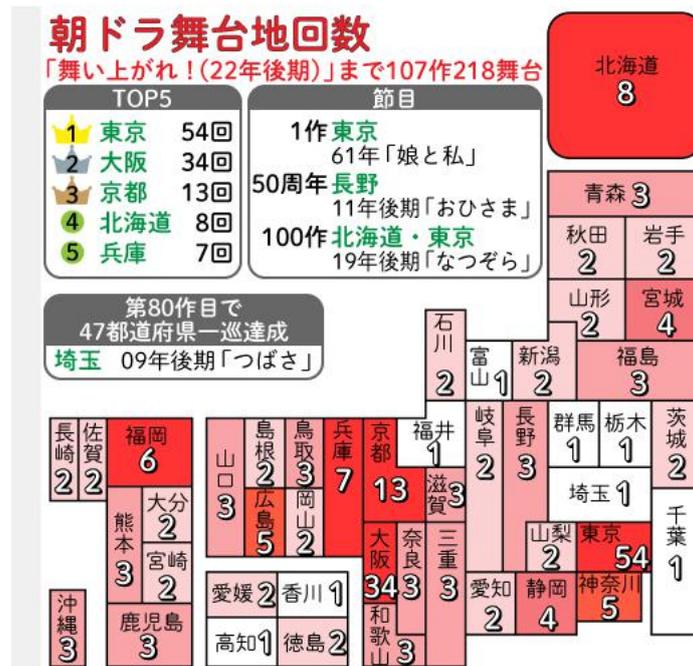


図 19 2022 年まで朝ドラ舞台地回数<sup>126</sup>

もちろん、当地の「方言」を使用する人口が多く、政治、文化、経済の中心である大都市は「方言」の「露出度」が必ず高いのだが、テレビドラマ、小説、マンガなどのメディアは「方言」に大いに活躍する機会を与えたということも決まりきった事実である。そして、これらの創作物に高頻度であらわれてくる「ヴァーチャル方言」は、創作物において「方言ステレオタイプ」を蓄積しやすく、また創作物そのものがその「方言ステレオタイプ」の拡張・増幅装置ともなる<sup>127</sup>。熊谷（2017）は二つのNHK地域のテレビドラマに絞って、方言イメージを作り上げる作品によって地域ステレオタイプを再生産するということについて探求した。一つは山形県高畠町が舞台としての『私の青おに』、もう一つは大阪府西成区と大正区が舞台『アオゾラカット』である<sup>128</sup>。結果から見ると、それぞれの従

<sup>126</sup> <https://www.nikkansports.com/entertainment/news/202112290000175.html>

<sup>127</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>128</sup> 熊谷滋子、『方言イメージが作り上げるドラマ—NHK 地域ドラマが再生産する地域ステレオタイプ—』、ことば、第38巻、2017年。

来の地域のステレオタイプ（東北・関西）を持って方言ドラマを作り出し、またドラマを通じてステレオタイプをより強固にすることがわかった。つまり、マスメディアに通じて、「ヴァーチャル方言」と「方言ステレオタイプ」が往復的な関係を形成する。

## 「打ちことば」としての「方言スタンプ」

「方言コスプレ」は今いろんなところで目立つようになった原因の一つは、「打ちことば」としての「方言」使用が無視できない役割を果たしたのである<sup>129</sup>。「打ちことば」とは携帯電話やパソコンのキーを使って私的場面で書かれたことばである。また、メールなどに使われる絵文字・顔文字や「いつあり（いつもありがとう）」などの略語による簡略化した表現や、漢字を多用するなどの特徴があるとされる。

第一章で述べたように、「方言」は80年代に転機を迎え始め、今日に至るまで価値のあるものとされてきた。90年代後半、インターネットが普及し、「方言」に関する記事の件数も増加した<sup>130</sup>。言い換えれば、「方言」に対する意識の変化はインターネット普及率の上昇とは関係ないとは言えない。定期誌『MarkeZine』は2018年、全国15～59歳の男女2000人を対象に、コミュニケーションツールに関するアンケートを実施した<sup>131</sup>。その中、LINEの利用率は全世代トータルで8割を超えた。家族や友人・知人との普段のコミュニケーションでは、LINEの存在感が一際目立ち、私たちの生活の中に、チャットコミュニケーションがどんどん浸透してきている。

---

<sup>129</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>130</sup> 同129

<sup>131</sup> <https://markezine.jp/article/detail/28430>

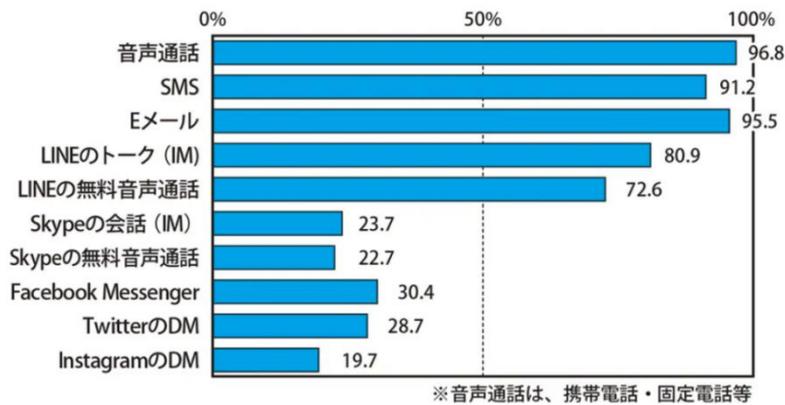


図 20 MarkeZine2018 年調査結果

さて、方言はどのように「打ちことば」として活躍しているのだろうか。「打ちことば」は基本的な場合で相手の顔を見えない状態で行われているコミュニケーションであり、「書きことば」の一種だが、そのため、ニュアンスなどの伝えは非常に難しく、(笑)などのカッコ文字や (^O^) のような顔文字、♥のような絵文字で気分を表すことしかできない。この際、人と人との関係を近づける「方言」は「打ちことば」としての最適な選択と言えるだろう。その中、LINE では、絵文字、顔文字の発展形であるスタンプが今流行っている。



図 21 毎日豆柴♡広島弁<sup>132</sup>

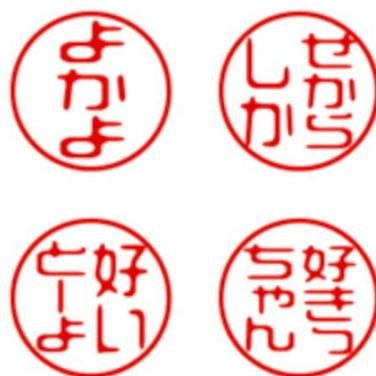


図 22 判子・ハンコ・はんこ<sup>133</sup>

<sup>132</sup> <https://store.line.me/search/ja?q=%E6%96%B9%E8%A8%80>

<sup>133</sup> 同 132

「じゃあの」とポーズしながら微笑む柴犬の「広島弁」、「よかよ・せからしか」と書いたハンコの「博多弁」などなど、地域方言をリソースとする「方言スタンプ」は検索エンジンで検索すると 5000 種類の結果が返された。「方言スタンプ」の基本構造は、可愛いイラストとその土地らしさが広く日本語社会において共有される、ある意味わかりやすい各地の「ヴァーチャル方言」との組み合わせである<sup>134</sup>。

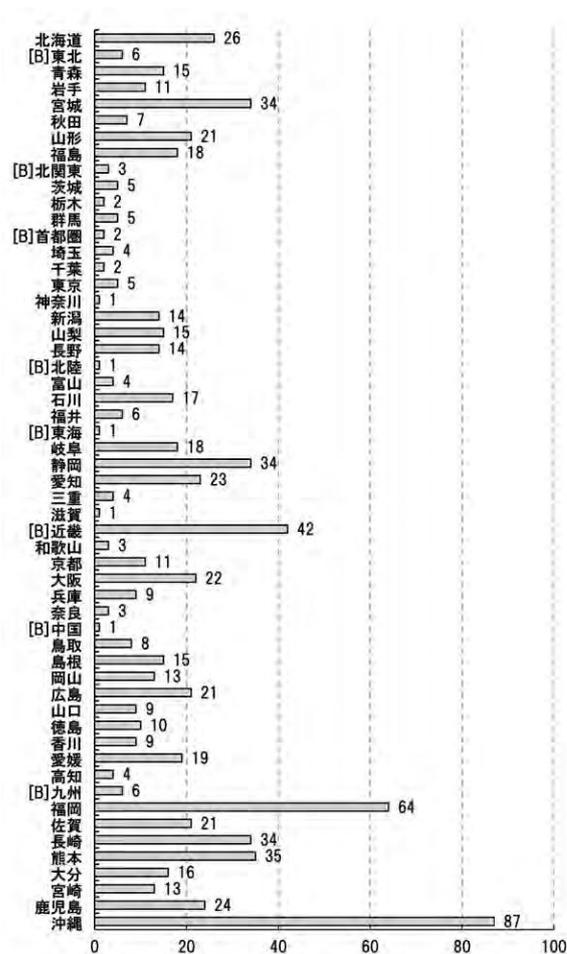


図 23 都道府県・地域ブロック別 LINE スタンプ出現点数<sup>135</sup>

<sup>134</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>135</sup> 林直樹、『方言スタンプからみる方言コンテンツの全国分布』、日本大学国文学会、編 160、2018年、pp.58-51。

そして、「方言スタンプ」にあらわれる地域名は従来指摘されている「方言ステレオタイプの強い方言」に偏っていることも証明した<sup>136</sup>。その結果、方言スタンプに現れるのは「沖縄」「九州（とりわけ福岡）」「近畿」であることがわかったが、前に指摘した「首都圏・関西圏が多く出現する」といった傾向とは大きく異なる。方言スタンプにおいて首都圏の出現点数が少ないのは、「方言」らしい語彙や音声の要素が少なく、とりわけ若年層において方言が「ない」と意識されていることによると林が解釈したが、また、九州・沖縄が多いことについては、九州方言イメージが近年変容し、九州方言を「気に病まなく」なった結果、「かわいい」と認識されるようになった傾向や、90年代以降における沖縄方言の価値の上昇が影響した結果とみることができそうである<sup>137</sup>。

要するに、「方言スタンプ」は波のように「ヴァーチャル方言」の使用、あるいは「方言コスプレ」を動かしている。これらかも line の活躍したことによって新しい言語動向をもたらすかもしれない。

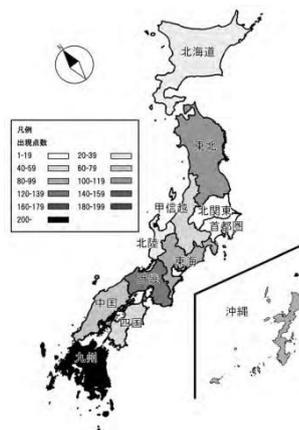


図 24 方言スタンプのブロック別出現数<sup>138</sup>

<sup>136</sup> 林直樹、『方言スタンプからみる方言コンテンツの全国分布』、日本大学国文学会、編 160、2018 年、pp.58-51.

<sup>137</sup> 田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫『国立国語研究所論集：一万人から見た最新の方言・共通語意識』repository.ninjal.ac.jp、2016 年.

<sup>138</sup> 同 136

## 第四章 方言萌え——方言とポップカルチャー

### 「方言萌えコンテンツ」とは

80年代以来、「従来の土地のことば」であった「方言」が、インターネットの普及により土地から解き放たれ、さまざまなポップカルチャーの形で続々登場した。特に「萌え文化」に重視する日本では、2012年「月曜から夜ふかし」で発表した「女子が使うとカワイイ方言ランキング」はネット上で結果の議論が沸騰した。2018年平昌五輪で活躍したカーリング女子日本代表が競技中にしばしば使っていた「そだねー」など北海道方言が混じった口調が、またネット上では「カーリングのみなさんかわいい」「会話聞いているとめっちゃ癒される」「そだねーは頻繁に使っていきたい」「女子の会話だ笑 かわいいからずっと聞いていたい」など話題になったり、Twitterのトレンド入りするほど注目を集めていた。そして、同年の「ユーキャン 新語・流行語大賞」年間大賞も受賞した<sup>139</sup>。このような事例によって「方言女子」に「萌える」ということが今、首都圏の若年層に限られた事象ではないことがわかった。つまり、「方言かわいい」「方言萌え」という感覚が現代日本語社会において出身・年齢を問わず通有されている。

「方言萌え」という感覚はどのように作り上げ、また広めるかということに、二〇世紀に蓄積された方言コンテンツによって拡散されたベタな「ヴァーチャル方言」や「方言ステレオタイプ」の積み重ねの上に成り立っていると解釈したことがあった<sup>140</sup>。第二章で議論したように、80年代以後方言は「悲運」を脱し、「価値があるもの」と見なされる。この過程で「方言萌え」という感覚も徐々に明確な形をとるようになり、全国の中に広がっている。

<sup>139</sup> <https://mdpr.jp/news/detail/1747869>

<sup>140</sup> 金水敏、『〈役割語〉小辞典』、東京、研究社、2014年。

「方言萌え」黎明期である 2000 年代前後に都会の若者の間に広まった「方言をしゃべる女子はカワイイ」という感覚は、2010 年代に入ると早々にコンテンツ化されている<sup>141</sup>。

「方言を話す女の子はカワイイ」を番組のコンセプトとして、オーディションで選ばれた地方出身の女性タレントたちが地元の方言を使って出演するバラエティ番組『方言彼女。』<sup>142</sup>（全 12 回）は 2010 年 10 月から同年 12 月まで毎週放送されていた。そして、続編となる『方言彼女。2』（全 12 回）、『方言彼女。0』（全 24 回）は 2011 年 4 月から 6 月まで、2012 年 10 月から 2013 年 3 月まで放送された。また、性別を入れ替え、2013 年 10 月から 12 月にかけて『方言彼女。』から引き続き『方言彼氏。』<sup>143</sup>が放送されていた。「方言は正義、美男子も正義。」をコンセプトとし、方言を話す若手俳優が、ミニドラマなどで方言の魅力を伝える。全国でも認知度の高いコンテンツとして、2012 年トヨタ『PASSO』の CM シリーズ<sup>144</sup>は絶対的にランクインする。フランス語のように聞こえる「津軽弁編」や、「宮古方言」で膝枕を表す「ムムマッフア編」、そして長崎出身の仲里依紗と川口春奈が共に長崎のわらべ唄を使った「でんでりりゅうば編」を出演しているのも大きな話題となっている。また、2014 年に「方言女子」を好む男性が増えているとの理由で、男性芸能人がゲストの場合に行われ、「方言女子」とトークをする企画「方言女子と喋ってみよう!!」は『TOKIO カケル』<sup>145</sup>番組で放送されていた。その中博多弁や福岡弁が大きな反響を呼び、Twitter では「福岡弁」がトレンド入りするほどの話題を呼びた。

---

<sup>141</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021 年。

<sup>142</sup> 東名阪ネット 6 と是空、ダブの共同制作。幹事局はテレビ埼玉

<sup>143</sup> 東名阪ネット 6 およびひかり TV の共同制作。幹事局はテレビ埼玉

<sup>144</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=ECpJoET8qnQ>

<sup>145</sup> フジテレビ系列にて 2012 年 10 月 10 日より放送されているトークバラエティ番組



図 25 DVD 「方言彼女。2 華盤」



図 26 DVD 「方言彼氏。スイート盤」



図 27 『ワンダ モーニングショット』のCM「おはよう編」

一方、「ナマドル」はこの時期で徐々に人々の視野で活躍してきている。「ナマドル」は、「訛りのあるアイドル」の略語である。地方出身のアイドルは、公の場では標準語で話すのが普通だが、方言を回避しなく話すアイドルが「ナマドル」として注目された。ナマドルの元祖は、山形出身、山形弁の訛りを話す佐藤唯である。ギャルっぽい見た目ながら方言の素朴さというギャップで可愛く感じさせて人気となり、テレビや雑誌などで取り

上げられ注目を浴びた。また、2014 年アサヒ飲料は、今年も国民的アイドルグループ「AKB48」を起用した『ワンダ モーニングショット』のCM「おはよう編」<sup>146</sup>を全国でオンエア開始した。今回は渡辺麻友、横山由依、木崎ゆりあ、柏木由紀の4名に加え、47都道府県各地の出身者47名から構成される「AKB48 チーム8」のメンバーが出身地の言葉でビジネスマンを応援しているCMであるが、これはまさか中央アイドルにもプラス方言で一層「萌える」の図式である<sup>147</sup>。



図 28 『ALWAYS 三丁目の夕陽』<sup>148</sup>

ドラマ・映画における「方言キャラ」は前から珍しくもないが、2010年前後に「方言女子」が登場する映画やドラマは大人気となった。女子の使う方言は男性からの評判が良く、普段は方言を話さない女の子が不意に出した時など、新鮮でかわいいと感じさせた。東京を舞台とする映画『ALWAYS 三丁目の夕陽』(2005年)では、堀北真希演ずる青森出

<sup>146</sup> <https://natalie.mu/music/gallery/news/125931/286536>

<sup>147</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

<sup>148</sup> 監督: 山崎貴、東宝、2005年

身の素朴な美少女キャラクター・星野六子が登場した。彼女は最初に自身の方言に対して劣等感を抱いたが、「言い直すことはない。お国の言葉は大切にすることだ」と言われ、その後正々堂々と方言を使い続けた。『ALWAYS 三丁目の夕陽』を初めとし、東北訛りで話し、アイドルの道を歩む少女を演ずる能年玲奈（『あまちゃん』2013年）、長崎弁を使い、臨時教員演じる新垣結衣（『くちびるに歌を』2014年）、大阪弁を喋り、バンドマネージャーを出演する二階堂ふみ（『味園ユニバース』2015年）、いずれも「方言×可愛い女の子=最強!」の公式の通り、「方言女子」のキャラクターで視聴者を癒す。

## 三次元から二次元へ

同時に、2010年代の中頃には「方言萌え」のキャラクターがリアルな三次元からアニメやマンガといった二次元作品の中で移行した。この移りいくことの背景には、全国で共通語化が完了したことにより、若年層においては、三次元の「方言キャラ」に対するリアル感が消失したと指摘した<sup>149</sup>。『ピクシブ百科事典』の定義を引用すると、「方言萌え」は、マンガやアニメのキャラクターなどが方言を使っているとき、そのギャップなどから萌えてしまうという現象のこと<sup>150</sup>。この定義から「方言萌え」が三次元の範疇ではなく、二次元キャラに特殊化しになることも分かれる。このようなマンガの中で、福岡の魅力が詰まった『博多弁の女の子はかわいいと思いませんか?』<sup>151</sup>（以下『博多弁』と省略）と名古屋弁訛りが溢れた『八十亀ちゃんかんさつにっき』<sup>152</sup>（以下『八十亀ちゃん』）が代表としている。この二つの作品はいずれも元著者がTwitterに投稿した漫画だったが、

<sup>149</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

<sup>150</sup> <https://dic.pixiv.net/a/%E6%96%B9%E8%A8%80%E8%90%8C%E3%81%88>

<sup>151</sup> 新島秋一、チャンピオン RED コミックス、秋田書店、2016年。

<sup>152</sup> 安藤正基、REX COMICS、一迅社、2016年。

人気を博したことを受けて連載化が決定し、『博多弁』は2019年福岡放送開局50周年記念スペシャルドラマとして放送され、『八十亀ちゃん』もアニメ化し、2019年テレビ愛知・TOKYO MX ほかにて放送された。



図 29 『名古屋以外全部壊滅』<sup>153</sup>

ちなみに、その間に、「郷土愛止まない」コンテンツも次々に登場している。代表的なものをあげると、2014年の「ツンデレ郷土愛」のこじらせ系の『お前はまだグンマを知らない』<sup>154</sup>、2016年の『ススメ! 栃木部』<sup>155</sup>、そして2017年の『三成さんは京都を許さない—琵琶湖ノ水ヲ止メヨ』<sup>156</sup>など多様なかたちで地元の文化やことばをアピールし、誇りを感じずることを言い表す作品がある。2022年も郷土愛を込めて地域の特徴を面白おかしく描いた『名古屋以外全部壊滅』という荒唐無稽な設定の短編ギャグマンガはインターネット上で広く読まれて話題になった。地域の特性や県民性をテーマとし、これからも人気作が次々と世に出ているだろう。

<sup>153</sup> 藤山佑、少年チャンプ+、集英社、2022年。

<sup>154</sup> 井田ヒロト、月刊コミック@バンチ、新潮社、2014年。

<sup>155</sup> 一葵さやか、コミッククリア、2016年。

<sup>156</sup> さかなこうじ、バンチコミックス、新潮社、2017年。

アニメにおいては、「方言キャラ」のかわいい外見に加え、プロの声優がキャラの声を担当することで、「萌える」のはより効果的になったのである。2016年社会現象とも言えるヒットを記録され、新海誠監督によるファンタジーアニメ『君の名は。』<sup>157</sup>には、上白石萌音が声を担当したヒロイン・三葉は普段は現代っ子らしく標準語を話しているが、時々飛び出す「～やよ」や「思い出せんの」という特徴的な語尾をつける方言はさらにさらにギャップ萌えを体現した。

そして、2018年のテレビアニメ『ポプテピピック』<sup>158</sup>において「方言女子」メタ化が出現した<sup>159</sup>。アニメ第一話で主人公のピピ美とポップ子の会話には「ヴァーチャル博多弁」を「萌え」要素としてメタ的に取り込んだシーンがある。ピピ美は「好きプリ?」と聞いて、ポップ子は「好いとーよ」と返事したら、ピピ美は「いや～ん、方言女子い～」といった。それを聞いたポップ子は笑みを浮かべてピースサインのをした。このようなメタ的な事例に対し、田中は、「方言コスプレ」「方言女子」「方言（女子に）萌える」といったフレームが、少なくとも「テレビアニメ」という場においてそれ自体がパロディーかされる対象、すなわち「方言女子としてふるまう方言コスプレ」が「コスプレ」可能となる程度にまで、日本語社会に定着してきたと指摘した<sup>160</sup>。



図 30 『ポプテピピック』神風動画はか 2018年

<sup>157</sup> 監督：新海誠、東宝、2016年。

<sup>158</sup> 原作：大川ぶくぶ、竹書房、2014年。

<sup>159</sup> 田中ゆかり、『読み解き！方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

<sup>160</sup> 同書

## 方言萌えマンガのあり方と対照分析

さて、二次元コンテンツにおけるキャラクターの「萌え属性」が具体的にどのように作品を通じて表現され、読者を引き付けるのか。この問題を読み解くために、まず具体的な漫画作品の構成から分析し始めたいと思う。「方言萌えマンガ」に関する先行研究は非常に少ないので、ここで引用したのは田中ゆかりがまとめた概念である。

「方言萌えマンガ」とは何か。まず、主人公格は「方言をしゃべるキャラ」であり、マンガのテーマ主には「方言」や「地域文化」の小ネタギャグであり、ストーリーの内容も度外視される場合が多い。大事なことは「方言をしゃべる主人公格キャラ」に「萌える」主人公格キャラが配置されるのであり（大体の場合方言キャラとジェンダーに反する）、加えて、作中でとりあげる「方言」や「地域文化」、さらにはそれらと結びつくステレオタイプを作者も読者も客体視しているのである。つまり、単に「方言キャラ」が出てくる、「ヴァーチャル方言」が使われているが、主人公の方言に萌えるキャラが登場しない、あるいは、類型化した方言や地域ステレオタイプとの結びつきはあまりに見出さない場合、それを「方言萌えマンガ」とは捉えない<sup>161</sup>。

具体的な作品をたどる前に、まず先行研究における「方言萌えマンガ」の特徴あるいは規律について説明しようとしている。前述のとおり、「方言萌えマンガ」研究の面では斬新な分野であり、田中（2021）以外の研究成果以外ほとんどないので、一応ここで彼女だけの結論を簡単に整理する。そして、ここでは、筆者も先に説明したいいくつかの特徴を兼ね揃えた三つの作品を選んで、「方言萌えマンガ」の「正体」を読み解こう。解析する方法は先行研究（田中 2021）を対照とし、そして共通点と相違点を考えていく。選んだ作品のタイトルは、『沖縄で好きになった子が方言すぎてツラすぎる』<sup>162</sup>（2020年 以下、

<sup>161</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

<sup>162</sup> 空えぐみ、新潮社、2020年。

『沖ツラ』) や『道産子ギャルはなまらめんこい』<sup>163</sup> (2019年 以下、『道産子』) また『北陸とらいあんぐる』<sup>164</sup> (2016年 以下、『北陸』) になっている。『沖ツラ』と『道産子』はラブコメディ・ストーリーマンガだが、『北陸』は「学園マンガ」と定義されているが、いずれも「方言マンガ」を検索するとき出てくる人気作品である。それぞれのタイトルから見ると、地名あるいはご当地の方言がついているのも「方言萌えマンガ」に共通する特徴である。

2021年の研究は4つの作品の素材をベースに展開されていたが、それぞれのタイトルは『博多弁』、『八十亀』、『方言って素晴らしいって漫画』(2018年 以下、『方言って...』) と『広島妹 おどりゃー! もみじちゃん!!』(2018年 以下、『もみじちゃん』) である。マンガの形態から見ると、『博多弁』、『八十亀』、『もみじちゃん』は「方言女子萌えマンガ」のギャグマンガであるのに対し、『方言って...』は「方言男子萌えマンガ」のラブコメディ・ストーリーマンガである。



図 31 『沖縄で好きになった子が方言すぎてツラすぎる』

<sup>163</sup> 伊科田海、集英社、2019年。

<sup>164</sup> ちさこ、KADOKAWA、2016年。



図 32 『道産子ギャルはなまらめんこい』



図 33 『北陸とらいあんぐる』

まず、マンガの内容構造から見ていく。2021年の研究では、①「方言女子」はヒロイン、「方言女子」に萌える「共通語男子」がヒーローという構造を持つ、主として学園を舞台としている②ヒーローとヒロインの出会いのきっかけはどちらかの「転校」という設定③欄外また別ページにご地方のものやことについての「解説コラム」が設けられているという三点を指摘したが、『沖ツラ』と『道産子』の場合、上記の三点に完全に当てはまる。言及に値するのは、『沖ツラ』で欄外の「解説コラム」以外に、ヒロインの喜屋武ひなとヒーローの中村照秋そして読者の間に第二ヒロインの比嘉夏菜を登場させ、つまり「通訳者」の役割を担当させる。この設定により、「共通語男子が方言ヒロインに萌える」の上で、方言ヒロインと通訳者ヒロインというダブルヒロインの間を揺れ動く主人公男子というラブコメの王道を可能にし、『沖ツラ』の萌え度も一段アップしている<sup>165</sup>。

それに対し、『北陸』は①と②の特徴に合わない。実はここの質問は、『北陸』というマンガは一体「方言萌えマンガ」なのだろうか。前に話した田中による「方言萌えマンガ」

<sup>165</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

の概念には、「方言をしゃべる主人公格キャラ」に「萌える」主人公格キャラが配置されるのであり、そして、大体の場合方言キャラとジェンダーに反するという要求があるが、『北陸』の主人公は3人とも女性であり、一見して「ルール違反」と見えるかもしれない。しかし、『北陸』は百合コメディであり、北陸出身の少女達が都内の全寮制女子高で出会い、当初は反発したりするものの次第に意気投合し合い、互いの心が惹かれ合っていくというストーリーである。故郷への愛情を持ちながら、故郷の方言を話すことは、視聴者がどの方言がよりかわいいかを比較すると同時に、「萌える」効果がすでに達成されていると思っている。また「転校」という設定は異なる言語変種との接触を物語の発端としているが、『北陸』では、三人の主人公は一緒に新しい高校行って新しい生活を送るのはストーリーの始まりだから、別に問題ないと思う。そのため、筆者個人の考えでは、『北陸』は「方言萌えマンガ」に数えられる。

次はキャラのネーミングから着手する。先行研究での「方言萌えマンガ」のヒロインとヒーローのネーミングは、方言キャラはご当地パーツ（ご当地性の高いものやこと、あるいはご当地の俚言に基づくこと）、共通語キャラは東京・都会パーツが組み込まれてい流のは一般、また、出身都府県に由来する漢字が織り込まれた命名となっている<sup>166</sup>。『北陸』の場合、主人公の3人（加賀ひまり、黒部りつ、越前和花）をはじめとする登場人物の名前は、北陸3県（それぞれ対応するのは石川、富山、福井）や信越地方の都市名や旧国名などにちなんだものとなっている。『沖ツラ』ではヒロインの喜屋武飛夏と比嘉夏菜の名字は旧琉球である沖縄の名字といわれ、強い地域性を反映することもできる。『道産子』の場合ならこのようなご地方に関する内容は名前には表れていない。ヒーローの名字

---

<sup>166</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

の「四季」(四季翼)に対し、ヒロイン三人の名字の中に、「冬」(冬木美波)「秋」(秋野沙友里)「夏」(夏川怜奈)の漢字がしかついでいないから、他に関連するものが見えにくい。

次、方言ヒーローの「萌え属性」を探求するために、キャラの性格、そしてマンガのセリフから見ていきたいが、先行研究において、すべてのヒロインに「天然」「ドジっ子」、他にも「ツンデレ」「ネコ(ネコ耳髪型+ネコの性質・動作)」「萌え袖」など「萌え属性」が付与されている。また、ヒロインとヒーローの出会いのシーンのセリフを見て、方言メーカーもりもりなヒロインに対し、ヒーローは驚いたり、「きゅーん」と萌えフラグを立てたりしていると指摘した<sup>167</sup>。『沖ツラ』『道産子』『北陸』のヒロインは上記の説明に完全に一致している。「天然」「ギャル」「萌え娘」いずれも「萌え属性」にピッタリあう。セリフの中でのヒーローの反応も、ヒロインの可愛さをより確かに際立たせている。

冬木美波: したっけ なまらわやでしょや 北見なんてさ

四季翼: ...ん～... ん?

方言が全然わからん...

(『道産子』第一話)

中村照秋: きっと うがんぶすくさーねー

喜屋武ひな: ポリリ... うが...?

何言ってるか

わからんけどポリポリしてる!! でもカワイイ...

(『沖ツラ』第一話)

---

<sup>167</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

『北陸』という百合マンガは素材のユニークさから、ヒーローとヒロインのこのようなやり取りはないが、マンガから女の子たちの萌えポイントが出てきた。セリフの横に添えられたハートや星の形をした絵柄がかわいらしさをさらにアップさせている。



図 34、35 『北陸』 第四話

次指摘された「方言萌えマンガ」の特徴は、主人公格の方言ヒロインに加え、ヒロインを取り巻くサブの「方言女子」が登場するのである。例えば、「名古屋弁ヒロイン」に対し、相対的に方言認知度低い近隣の「岐阜弁女子」と「三重弁女子」を配置し、「広島弁ヒロイン」には岡山県寄りの「備後弁女子」を配置する。これは地域内ヒエラルキーというちょっと危険なネタを投入するための装置である<sup>168</sup>。『北陸』の場合に3人はそれぞれの地域の方言を話しているが、人物レベルでは主次的な区別はないと思う。『沖ツラ』と『道産子』ではサブの「方言女子」が設定されていたが、同じ舞台の「沖縄」「北海道」の方言を喋っている。つまり、3つの作品はいずれも以上の特徴に合わないということである。

<sup>168</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

最後に、先行研究では「方言萌えマンガ」の舞台となる地域が、作者の出身地であると言うだけでなく、従来の方言イメージ調査では特定のイメージとの結びつきの弱い地域の方言または男性ジェンダー性の高いステレオタイプと結びついた方言が選択することが多いと指摘した。これは、「方言ステレオタイプ」を活用しつつ、方言ヒロインの「かわいさ」とのギャップ萌えを狙ったものだ<sup>169</sup>。例えば、男性ジェンダー性の高いステレオタイプがある福岡と広島を舞台としている作品が流行している。しかし、『沖ツラ』『道産子』そして『北陸』の舞台は沖縄、北海道、石川、富山、福井であるが、いずれも「あたたかい」「素朴」という「方言ステレオタイプ」を持っている地域である。つまり、この真摯な性格を利用し、人物の「萌え程度」を増すのが、「方言萌えマンガ」の新たな特徴かもしれない。

要するに、今回筆者自分の「方言萌えマンガ」の探求成果は前の研究の結果とほぼ一致している。これ以外に、マンガ背景としての舞台について差があるが、北海道や沖縄の方言は図 15、図 16、図 17 のように、従来「露出度」高い方言の 2 つ方言としているから、「方言萌えマンガ」に出てくることに当然だと思う。「方言ステレオタイプ」の観点から見れば、『北陸』の方は先行研究における「名古屋弁」と同じ立場を持ち、「北陸方言ヒロイン」はこれまでにないヒロイン像の創出、「北海道弁」「沖縄方言」のヒロインにおいては、従来のステレオタイプを逆手にとったご地方ディスリ兼ヒロインに対するギャップ萌え創出の装置となっているかもしれない<sup>170</sup>。

また、百合マンガも「方言萌えマンガ」に属する無視できない存在だと思う。2020 年の百合マンガ『すいとーと!』も福岡を舞台とし、博多グルメを食べるをメインテーマとしている作品で人気を博した。ヒーローの存在がなくても、方言女子は作品の中でかわい

<sup>169</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021 年。

<sup>170</sup> 同書

い姿で視聴者を「萌え」と感じさせることができる。そのため、百合方言マンガもこれから「方言萌えマンガ」の一種として研究する価値があると思う。

## 「方言萌え」コンテンツに内包する問題

初期的な「方言萌え」の典型は、男性から見て「方言を話す女性はかわいい」というようなものであるが、最近では、「方言を話す人はかわいい」という男女問わないようなものになった。しかし、前に挙げられた「方言萌えマンガ」の例のとおり、方言話者キャラを女性に設定し、男性キャラに萌える場合は依然として多いと言える。これは、男性から女性へ、という庇護意識・支配意識のようなジェンダー的に不均衡な視線という問題が内包されている<sup>171</sup>。

ネットで「方言女子かわいい」をフレーズ検索した結果をみると、

- ・方言女子はなぜかわいい? 男性の心理を紹介
- ・男心をつかむかわいい方言ランキング!
- ・可愛くてたまらない「方言女子」が魅力的な理由とは
- ・女性の方言がかわいい理由 15 選! 男性が惚れる胸キュンフレーズも!

のようなコンテンツは大量に出てくる。女性が「方言をしゃべる」という要素は男性の心を捉えるためにプラスのアイテムであることがわかった。また、『週刊ビッグコミックスピリッツ』という青年誌に掲載された男性作家（窪之内英策）によるマンガ『チェリー』に、この「可憐な容姿＋方言＝激萌え」の構図にぴったりと当てはまる「方言美少女＝天

---

<sup>171</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

使キャラ」が採用される一方、同じ青年誌掲載された女性作家（山崎紗也夏）によるマンガ『愚かの民』では、「方言萌え」に対する拒絶が描かれていることから、ジェンダー的に不均衡な視線の内包も確認できる<sup>172</sup>。

現在、「女子向け」の方言作品も大量に出てきて、「方言」を「かわいい」と評価するものも女性から男性へという方向があるとよく指摘したが<sup>173</sup>、初期の男性から女性へという庇護意識・支配意識は事実であり、このような作品は今でも主流として市場を占領していると思う。こうした不平等なジェンダー的な視線はこれからの作品において現し続けるかどうか、今後の研究に探求する価値があると思う。

---

<sup>172</sup> 田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

<sup>173</sup> 同書

## おわりに

本論文で行った研究と分析は、日本の言語社会における人々の方言意識の変化、また、それによって現代方言の新たな使用を理解するのに役立つと思う。

土地と結びついたリアルな方言は生活のことばとして真情を示し、それを受けとめる人々の心に温かい何かを充たす。メディアの影響で、現代日本語社会における「方言」の価値の上昇するとともに、「ヴァーチャル方言」の形で「方言」を共有しない人々にも、地域を超えた紐帯を伝送した。「ヴァーチャル方言」がリアルなコミュニケーションを円滑化するという、近年前景化してきた「方言」の新しい用法とその効能は見てきていた。人々の頭の中にある「〇〇方言」や「〇〇弁」に与えられる「方言ステレオタイプ」に基づいた「ニセ方言」を着脱することで自分がのぞむキャラを操り出す「方言コスプレ」現象はその新しい用法のひとつとして近年注目されている。

2000年代に入って以来、キャラクター論が活発化し、言語研究においても、「キャラ」の定義や取り扱いなどについては多様な議論のあるところである<sup>174</sup>。この文脈で、日本ポップカルチャーにある「方言キャラ」もよく焦点として読み解きされている。「方言ドラマ」「方言アニメ」といった様々な作品によって、「方言キャラ」により生き生きとしたイメージを与える「方言指導」という職業もますます注目されている。本論文で討論した「方言萌えマンガ」もその中に登場する「ヴァーチャル方言」によって意図的に作られた「方言キャラ」を捉えた上で、主人公「萌える」の「秘密」を示していた。

これまでに書かれた内容によれば、方言の将来性は楽観的である可能性が高い。人々は自分の態度を見せたい、「クール」に話したいから、ことばの「アクセサリー」として使

---

<sup>174</sup> 田中ゆかり、『読み解き! 方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

っている方言も確かに今の若者に愛されている。現在、日本語の標準化は終わり、人々は方言に対する態度と使用に大きな転換を遂げている。誰でも個人の状況によって異なる独立した言語システムを持っているので、方言の研究も言語コミュニティから話し手個人に転向すべきである。これからの研究で、このような新しい言語行動がどのように日本の新しい世代の若者の言語習慣に影響し、形成しているのかといった問題について見解と方法を期待している。

## 参考文献

ドーア根理子、『通じることの必要性について——標準化のイデオロギー再考』、『文化、ことば、教育——日本語 / 日本の教育の「標準」を越えて』、東京、明石書店、2008年、pp. 63–82.

林直樹、『方言スタンプからみる方言コンテンツの全国分布』、日本大学国文学会、編 160、2018年、pp.58–51.

井上史雄・鏈水兼貴、『新しい日本語』、東京、東洋書林、2002年.

イ・ヨンスク、『「国語」という思想——近代日本の言語認識』、東京、岩波書店、1996年.

金水敏、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、東京、岩波書店、2003年.

金水敏、『〈役割語〉小辞典』、東京、研究社、2014年.

国立国語研究所、『言語生活の実態：白河市および附近の農村における』、東京、秀英出版、1951年.

小林隆、『アクセサリーとしての現代方言』、社会言語科学、第7巻1号、2004年、pp.105–107.

熊谷滋子、『方言イメージが作り上げるドラマ—NHK 地域ドラマが再生産する地域ステレオタイプ—』、ことば、第38巻、2017年.

木部暢子、『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』、国立国語研究所、2011年2月.

野村剛史、『日本語スタンダードの歴史—ミヤコ言葉から言文一致まで—』、東京、岩波書店、2013年。

大橋純一、『方言使用の効用—その世代的位置と特性』いわき明星大学人文学部研究紀要、二四、いわき明星大学人文学部、2011年。

大阪教育大学付属天王寺中学校自由研究、第43集、2018年。

定延利之、『ささやく恋人、りきむレポーター』、東京、岩波書店、2005年。

真田信治、『ことばの変化のダイナミズム—関西方言における neo-dialect について—』、言語生活、429、1987年、pp.26–32。

真田信治、『滋賀県今頭町、福井県上中町言語調査報告』、大阪大学文学部紀要、第36巻、大阪、大阪大学文学部、1996年、pp.31–64。

真田信治、『脱・標準語の時代』、東京、小学館、2000年。

柴田武、『日本の方言』、東京、岩波書店、1958年。

柴田武、『方言論』、東京、平凡社、1988年。

田中克彦、『ことばと国家』、東京、岩波書店、1981年。

田中ゆかり、『着脱される「属性」——方言「おもちゃ化」現象——』、2007年。

田中ゆかり、『「方言コスプレ」の時代—二セ関西弁から龍馬語まで—』、東京、岩波書店、2011年。

田中ゆかり、『「方言」が価値を持つ時代—— Stigma から Prestige、そして...』、都市問題、特集1、2014年、pp.9–11。

田中ゆかり、『方言萌え!? —ヴァーチャル方言を読み解く—』、東京、岩波書店、2016年。

田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫『国立国語研究所論集：一万人から見た最新の方言・共通語意識』 repository.ninijal.ac.jp、2016年。

田中ゆかり、『読み解き！方言キャラ』、東京、研究社、2021年。

東条操、『日本方言学』、東京、吉川弘文館、1954年。

上田万年、『帝国文学』、帝国文学会、1885年。

柳田国男、『蝸牛考』、東京、刀江書院、1930年。

安田敏朗、『<国語>と<方言>もあいだ——言語構築の政治学』、京都、人文書院、1999年。

安田敏朗、『脱「日本語」への視座』、東京、三元社、2003年。

BOURDIEU, Pierre, language and symbolic power, Cambridge(MA), Harvard University Press, 1991.

INOUE, Fumio, Standardization and de-standardization processes in spoken Japanese, Language Life in Japan: Transformations and Prospects, London, Routledge, 2011, pp. 109–123.

IRVINE, Judith & GAL, Susan, Language ideology and linguistic differentiation, Regimes of language: Ideologies, politics, and identities, Santa Fe, School for Advanced Research Press, 2000, pp.35-84.

HEINRICH, Patrick, Dialect cosplay. Language use by the young generation. Being Young in Super-Aging Japan, London, Routledge, 2018, pp. 166–182.

HEINRICH, Patrick, & YAMASHITA, Rika, Standardization, ludic language use and nascent superdiversity, Urban Sociolinguistics, London, Routledge, 2018, pp.130-147.

HEINRICH, Patrick, After Language Standardization: Dialect Cosplay in Japan, Language Standardisation and Language Variation in Multilingual Contexts, Bristol, Multilingual Matters, 2022, pp.281-297.

MAHER, John C, Metroethnicity, language and the principle of cool. International Journal of the Sociology of Language, Berlin, De Gruyter Mouton, pp.83–102.

Paul Kroskrity, *Regimes of language: Ideologies, politics, and identities*, Santa Fe, School for Advanced Research Press, 2000.

POUNTAIN, Dick & ROBINS David, *Cool Rules: Anatomy of an Attitude*, London, Reaktion Books, 2000.

## 参考サイト

朝ドラ舞台地回数マップ:

<https://www.nikkansports.com/entertainment/news/202112290000175.html>

第20期国語審議会:

[https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/index.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/index.html)

「でーじ」の紹介:

<https://meaning-book.com/blog/20181023100438.html>

言語イデオロギー:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A8%80%E8%AA%9E%E3%82%A4%E3%83%87%E3%82%AA%E3%83%AD%E3%82%AE%E3%83%BC>

被災地における方言の活性化支援:

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/kasseikajigyo/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/kasseikajigyo/index.html)

方言萌え:

<https://dic.pixiv.net/a/%E6%96%B9%E8%A8%80%E8%90%8C%E3%81%88>

「じょーとー」の紹介:

<http://i-uchina.com/emotional/post4628/>

カーリング女子「そだねー」が可愛いと話題 芸能界でも流行語に? <平昌五輪>:

<https://mdpr.jp/news/detail/1747869>

コミュニケーションツールの今:

<https://markezine.jp/article/detail/28430>

国立国語研究所、『日本語ブックレット 2005』

[https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nihongo\\_bt/2005/](https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nihongo_bt/2005/)

言葉のゆれ:

[https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/01.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/01.html)

高知大学教育学部 日本語学研究:

<http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/kougi01.html>

line 方言:

<https://store.line.me/search/ja?q=%E6%96%B9%E8%A8%80>

生活に必要なものに関する情報源:

<http://www.garbagenews.net/archives/1060031.html>

「しに」の紹介:

<https://meaning-book.com/blog/20190114152102.html>

新方言:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%96%B9%E8%A8%80>

ステレオタイプ:

<https://sports-for-social.com/3minutes/stereotype/>

東京外国語大学博士学位論文:

<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/51462/6/dt-ko-0105004.pdf>

トヨタパッソ 2012 CM:

<https://www.youtube.com/watch?v=ECpJoET8qnQ>

ウチナーヤマトグチ:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%81%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%83%88%E3%82%B0%E3%83%81>

ワンダ モーニングショットのCM「おはよう編」:

<https://natalie.mu/music/gallery/news/125931/286536>





